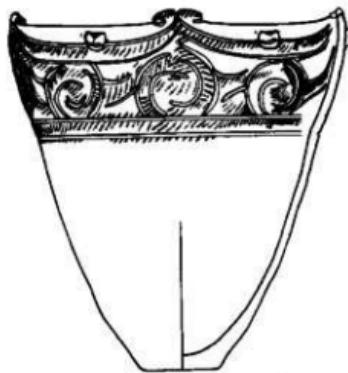


明專寺・茶臼山遺跡



1980

牟礼村教育委員会



明專寺・茶臼山

1980

牟礼村教育委員会

序 文

牟礼村教育委員会

教育長 米澤竹志

靈峯飯綱山より一望する牟礼村一帯には数多くの遺跡が散在している。その分布状態を見るに現在の集落とは離れたところに位置し、往古の生活が大自然の中に從容として育まれていたことが伺われる。飯綱山には、四ヶ所からなる沢があり集水の源を成し寄り集まつた水は大小の河川を形成し、山麓から牟礼の集落地に流れて生活の拠点をなし、連綿として現在迄言葉には表し難い恩恵を与えていた。

今回発掘した茶臼山明專寺地区は、八蛇川の側に位置しこんもりした丘陵地帯であるが、共に前述の条件を充たす絶景の地である。北西に飯綱山戸隠山黒姫山妙高山が聳え、東に斑尾山菅平高原が美しく姿を現し、南の三登山に囲まれた盆地状の所である。土民はこの展望よき地に住居を構えて、朝に夕に獣を捕え魚をとり草木を摘んで生活していたことであろう。終戦後にあっても川の流れは清く魚多かりしも今は、その面影もなくただ上流にイワナ等の棲息していることが自然を愛する気持を慰めてくれる。

昭和五十四年度県営圃場整備が実施されるに当たり、この地が埋蔵文化財の包蔵地として県より指定を受け発掘調査が行われた。調査は七月十五日に調査団長の永峯先生が現地にこられ指導され森、島田両先生が千葉及び佐久より見えて連日連夜調査研究に専念された。又綿田、宮城、徳竹の三氏が大学の暑中休暇を利用して調査研究を重ねられた。調査に当られた先生方のご労苦に対し心より御礼を申し上げる。この間多くの地元の皆さんとの援助を得て着々と作業が進められ、当初西小学校上級生が進んで作業してもらえたことも共に感謝に耐えない。

この調査が順調に進み予期以上の成果を収め得ることの出来たのは、県文化課開・白田両指導主事の適切なるご指導によるところであり、調査会の方々の終始耐ゆまないご努力のお蔭であり併せて厚くお礼を申し上げる。

丸山遺跡をはじめとして、遂次時代の異なった遺跡が発掘され牟礼村全域にわたる古代のことが些少ではあるが解明されることは喜ばしい限りである。

炎暑の中時には雷雨の日も鋭意調査にご尽力を下された関係のみなさんに厚くお礼を申し上げ結びとする。

例　　言

- 1 本書は、昭和54年7月28日～8月10日までにわたって発掘調査された、長野県牟礼村大字川上1666番地に所在する茶臼山遺跡、同柳里20番地に所在する明専寺遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、北信土地改良事務所の委託を受けた牟礼村教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、永峯光一（国学院大学講師）を発掘担当者とし、牟礼村教育委員会が委嘱した発掘調査団によって行なわれた。また、本書の作成も同調査団が行なつた。
- 4 本書に挿入した遺構、遺物の実測図作成は、調査員全員が行なつた。
- 5 本書に掲載した写真は、森尚登、宮城孝之、綿田弘実が撮影したものを使用した。
- 6 本書の執筆は、文責を文末に明記した。
- 7 本書の編集は、森尚登、島田恵子が行ない、永峯光一調査団長が校閲した。
- 8 調査に関しては、次の方々から御教示および協力をいたゞいた。明記して感謝の意を表したい。（敬称略、順不同）
廣瀬 昭弘、高田 博、竹本 実希子、三石 延雄、須坂高校教諭島田 春生、
- 9 本遺跡の資料は、牟礼村教育委員会の責任下に保管されている。

なお、本遺跡調査に関して、県教育委員会、関孝一、白田武正の両指導主事には、調査に関し適切な御指導をいただき、更に西小学校職員、児童の方々の協力および地元の方々からは物品両面にわたる御援助を賜わりここに厚くお礼申し上げる。

本文目次

序文	
例言	
本文目次	
付表目次	
挿図目次	
図版目次	
第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る動機	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 発掘調査日誌	5
第2章 遺跡の環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 考古学的環境	8
第3節 歴史的環境	11
第3章 層序	12
第4章 遺構と遺物	13
明専寺遺跡	
1 住居址	13
1) J 1号住居址	13
2) J 2号住居址	18
2 土城	21
1) D 1号土城	21
2) D 2号土城	22
3) D 3号土城	23
第5章 包含層出土遺物	24
1) 土器及び土製品	24
2) 石器	32
第6章 まとめ	37

茶臼山遺跡

1 遺構	39
2 遺物	41
1) 土器及び土製品	41
2) 石器	48
3 茶臼山遺跡まとめ	51
引用参考文献	54

附表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	10
-------------	----

挿図目次

第1図 明專寺・茶臼山遺跡周辺の地形と発掘区設定図	4
第2図 明專寺・茶臼山遺跡の位置と周辺遺跡	9
第3図 明專寺遺跡層序模式図	12
第4図 茶臼山遺跡層序模式図	12
第5図 明專寺遺跡造構全体図	14
第6図 J 1号住居址付近の疊群集石状態	15
第7図 J 1号住居址実測図	16
第8図 J 1号住居址出土遺物実測図	17
第9図 J 2号住居址実測図	19
第10図 J 2号住居址出土遺物実測図	20
第11図 D 1号土塙実測図	21
第12図 D 2号土塙実測図	22
第13図 D 3号土塙実測図	23
第14図 明專寺遺跡包含層出土土器及び土製品実測図	25
第15図 明專寺遺跡包含層出土土器拓影	28
第16図 明專寺遺跡北拡張区出土土器実測図	29
第17図 明專寺遺跡北拡張区出土土器拓影 1	30
第18図 タ 2	32
第19図 明專寺遺跡出土土器実測図	33
第20図 タ	34

第21図 明専寺遺跡出土石器実測図 35

茶白山遺跡

第1図	茶白山遺跡造構全体図	40
第2図	茶白山遺跡出土土器拓影	42
第3図	々	44
第4図	茶白山遺跡出土土器拓影及び実測図	46
第5図	茶白山遺跡出土土製品実測図	47
第6図	茶白山遺跡出土石器実測図	48
第7図	茶白山遺跡出土石器実測図	49

図版目次

明専寺遺跡

図版1	1. 遺跡遠景（東方より）	2. 調査区近景	
図版2	1. J 1号住居址確認状況（北方より）	2. J 1号住居址全景（南方より）	
図版3	1. J 2号住居址確認状況（南方より）	2. J 2号住居址全景（南方より）	
図版4	1. J 2号住居址炉と埋設土器（西方より）	2. D 1号土塙全景（北方より）	
図版5	1. おー6グリッド土器出土状態	2. 北拡張区埋甕出土状態	
図版6	1. J 1号住居址出土土器	2. J 2号住居址出土土器	3. 北拡張区出土土器
図版7	1. 包含層出土土器		
図版8	1. 北拡張区出土土器No.1		
図版9	1. 北拡張区出土土器No.2		
図版10	1. おー6グリッド出土土器	2. 石器	
図版11	1. 石器		

茶白山遺跡

図版1	1. 遠景（東方より）	2. 近景（南方より）	
図版2	1. えー4グリッド土器出土状態	2. えー5グリッド土器出土状態	
図版3	1. うー1グリッド土器出土状態	2. こー1グリッド耳栓出土状態	
図版4	1. えー2グリッド石冠出土状態	2. えー99グリッド石劍出土状態	
図版5	1. 包含層出土土器No.1		
図版6	1. 包含層出土土器No.2		
図版7	1. きー3グリッド出土土器	2. おー100・うー3グリッド出土土器	
図版8	3. うー1グリッド出土土器	4. 包含層出土土器No.	
図版9	1. 耳栓	2. 土偶	3. 石鏡
図版10	1. 石器		

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る動機

今回緊急発掘調査を行なう契機は、昭和54年度に実施する県営圃場整備事業にともない、遺跡が破壊される恐れが生じ、教育委員会は県文化課の関孝一指導主事の指導を受けて、6月10日、16日、19日、7月11日の4回にわたって発掘区の範囲確認を行なった。

その結果、遺跡として登録されていた強清水遺跡は調査の必要を免れ、茶臼山遺跡をはじめ、新たに字柳里地籍が遺跡であることが判明し、村教育委員会は、遺跡発見届けを提出すると共に、両遺跡を記録保存として善処すべく発掘調査のための態勢に入った。

7月15日、現地に於て、永峯光一団長、森尚登主任、島田恵子調査員及び県教委関孝一指導主事、村教委事務局により緊急発掘調査のための打ち合せ会を行ない、7月28日より調査実施する運びとなった。

第2節 発掘調査の概要

●遺跡名及所在地 長野県上水内郡牟礼村大字川上 1-666番地 茶臼山遺跡
タタタ 大字柳里 20番地 明専寺遺跡

●発掘期間 昭和54年7月28日～8月10日

●調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

米澤 竹志	牟礼村教育委員会教育長
池内 健造	タタタ 教育次長
仲俣 弥一	タタタ 社会教育係長
加藤 みどり	タタタ 教育委員会事務係

●調査団の構成は下記の通りである。

茶臼山・明専寺遺跡調査団組織		
顧問	金井 義男	牟礼村長
タタタ	原田 幸衛	議會議長
相談役	岡田 一雄	改良区理事長
タタタ	高野 俊雄	議会文社委員長

会長	小林 幹雄	文化財調査委員長
副会長	井沢 静	教育委員長
・	白鳥 翼	文化財調査副委員長
理事	上野 涼	文化財調査委員
・	白井健太郎	・
・	武居 裕	・
・	田中 益男	・
・	矢野 恒雄	・
・	青山 紫朗	・
・	米沢 稔秋	・
・	井沢 信雄	・
・	丸山 良雄	教育委員
・	小川專之助	・
・	白石 傑雄	・
・	深瀬 幸子	議会文社委員
・	梨本 忠一	・
・	矢野 広義	・
・	丸山 久	公民館長
監事	目須田 勉	収入役
・	金井 庄五	総務課長

調査団

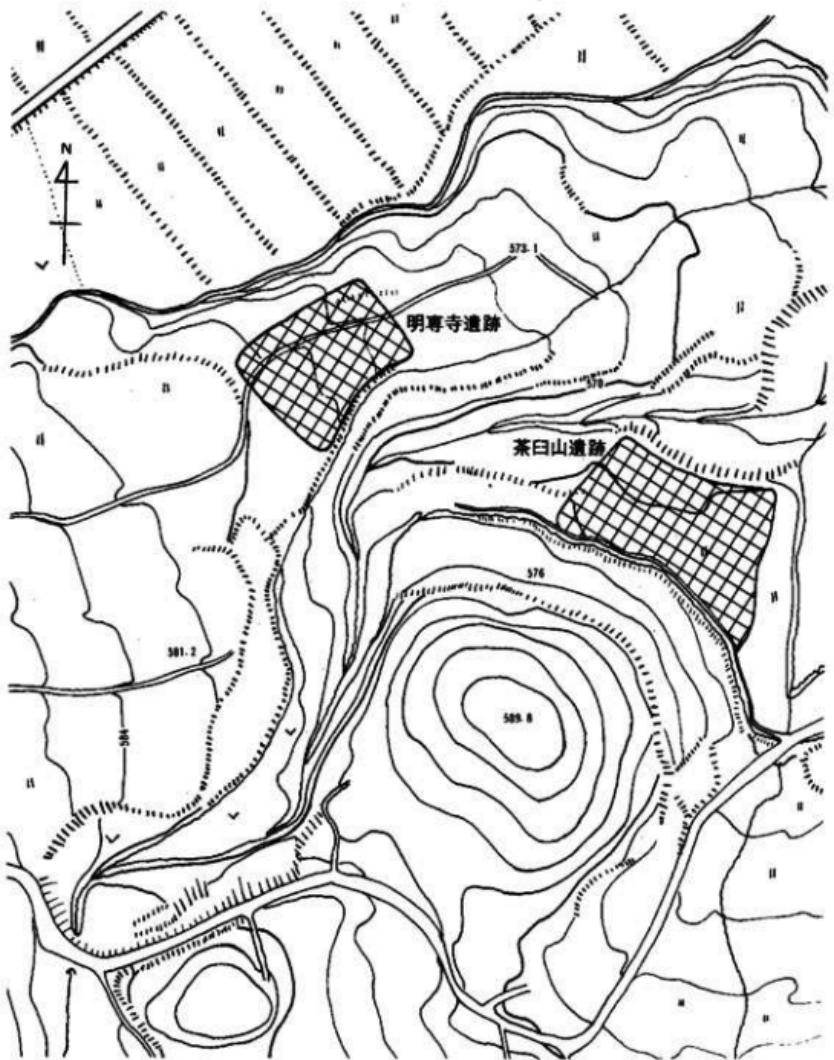
団長	永峯 光一	日本考古学协会会员・国学院大学講師
主任	森 尚登	千葉市真砂中学校教諭
調査員	島田 恵子	長野県考古学会会員
補助調査員	宮城 孝之	・信州大学生
	綿田 弘実	・立正大学生
	徳竹 雅之	奈良大学生

調査協力者

小林 千春	北信土地改良信濃町支所
松田 謙吾	土地改良区事務局長
金井 元司	・ 会計主任

本山 秀 土地改良区工事主任
片山 哲夫 タ 事務局員
北沢 京子 タ タ
大塚 正一 北条組現場監督
KK 北条組
牟礼村土地改良区役職員

作業協力者 杉山 義貞 川口寛治 島田 きみい 伊藤 いね子
高野 和子 伊藤ミツエ 宮口 美登志 松井 エツ子
松井 三四子 松井はまえ 松井 百重 井沢 きくの
外谷 けきよ 朝比奈 とめ 米沢 はつ 丸山 とよ
米沢 ふじえ 丸山 れい子 金井 忠雄 池田 秋治
金井 明 金井 ゆきえ 清水 一三 池内 たけ子
松沢 勝子 大内 なか江 土屋 とな子
(以上地元協力者)
佐藤 義之 野村 彰人 池田 晃 沼倉 恵司
小谷 昇司 古平 和宏 田中 耕輔 広田 稔
野村 達也
(以上北部高校生)



第1図 明専寺・茶臼山遺跡周辺の地形と発掘区設定図 (1 : 2500)

第3節 発掘調査日誌

○7月26日（木） はれ

明專寺遺跡をほ場整備事業請負業者北条組の協力により、土堤と耕作土の削平を行なう。同時に遺跡範囲の確認を行なう。

○7月27日（金） くもり

グリッド設定、トランシットを使用して基準坑の前方を真北に設定し、東西にあへす、南北に1～7（あへおにかけて1～7、かへすまでは土寄せ場と重機の通路のため、1～6となる。）計88G（4×4m）を設定する。

西小学校の教頭先生より申し入れがあり、5、6年生の児童が午後より見学と実習を兼ねてお手伝いに来る。本格的な調査は明日からなので、あへえの1～7までのグリッドに入り、デコボコの表土を平にする作業をしてもらう。初めての経験に小学生は土器片を見つけると大喜びであった。

○7月28日（土） 雨のちくもり一時雨

本日より調査補助員、地元協力者の参加があり、本格的な調査に入る。

村長、議長、教育長をはじめとした牛込村の関係者の方々が出席され、結団式が行なわれる。あいにく雨になり明專寺遺跡と茶白山遺跡の通路を作るため、草刈と橋の補強をしてひとまず開放する。午後になると雨が上り再度集合し、うへすにかけて1m巾のトレンチを入れる。一昨日の耕作土削平により、調査区のほぼ全面が黒色土となったため、トレンチにより全容を調査するためである。

○7月29日（日） くもり

昨日に引き続きトレンチの作業を続行する。

南北にも、う例の1～7に1m巾のトレンチを入れる。トレンチ内清掃作業の結果、大小の山石が散在し、特に南北トレンチの6、7のG内に多い。また、層序は黒色土で全面が覆われ、遺構の検出は困難であろうとおもわれる。遺物は堀の内I、II、加曾利Bである。

○7月30日（月） はれ

山石の集石を解明するため、特に集石の多かった、南北トレンチに続いたえへき・4、5、6のG内を掘り下げる。6本指の土偶の足が2足出土。つま先とかかとの部分で別個体とおもわれる。更に土塙が検出され、D1号と命名。

●茶白山遺跡をほ場整備工事の進行上、早急に調査しなければならないため、再度北条組に重機をお願いし、土堤の切りくずしと耕作土の削平を行なう。

○7月31日（火） はれ

昨日に引き続き集石の部分の掘り下げ及び石の清掃を行なう。集石の下から炉が検出される。集石の状態、石質及び調査区全面に大小さまざまな山石が散乱し、石質の異なる石が見あたらず、他から運ばれた意図が伺えない事等からしても、自然現象（飯綱泥流）によるものと想定されよう。しかし、再度検討するため集石の状態を午後より実測する。トレンチの断面図を実測。

ほ場整備工事進行中、調査区外の八蛇川ぞいの土堤の際に重機を入れたところ、多量の土器片が出土したため、新たに調査区を拡張

する。しかし、土堤際の狭い面積のため、充分な調査は不可能であり、土器の散布状態等を実測するため、重機でくずされた部分の精査及び清掃を行なう。

●茶臼山遺跡 明日から明專寺遺跡と平衡して調査するためグリッド設定を行なう。明專寺遺跡と同じく、村役場建設課片山哲夫氏の協力でトランシットにより、真北に基準杭の前方を設け、東西にあへ、南北に1~7(4×4m)計63グリッドを設定する。しかし、あへの間は地形的に出っぱっているため、100~98まで12グリッドを設けた。

○8月1日(水) はれ

昨日に引き続き、集石の状態を実測。D1号の実測も行なう。さらに新調査区の土器散布状態の実測をする。4m四方の範囲に大量に散見する土器片は、地形的にみて土器捨て場的存在の遺構ではないだろうかとおもわれる。

●茶臼山遺跡 本日より2班に別れ、残りの作業を明專寺遺跡で行なう班と、茶臼山遺跡で遺構検出を行なう班とで調査も多忙となる。水田であったため地面が湿っていたところを日照りにあつたり、耕作土の削平を重機で行なったため、地が固くなり、合せて小礫が混っていてスコップでの作業はきつく、はからない。

○8月2日(木) はれ

集石の実測を終了し、炉の実測を行なう。終了後、住居址のプランを確認するため、炉付近の集石を取り除く作業に入る。

●茶臼山遺跡 遺構検出作業の続行。

地形的に三段になっており、上段が粘土層、中段が砂礫層、下段が漆黒層である。上段の中段の土堤であった部分に落込みがあり、土器片もユニット的に出土したため、精査を行なう。晩期の遺跡の可能性が強い。

○8月3日(金) はれ

昨日、炉付近の集石を除く作業が終了したのでプラン確認を行なう。東側にピットが検出される。J1号住居址と命名。炉の切開を行なう。

●茶臼山遺跡 上、中段の土堤であった部分の落込みによる遺構の残存部は微少でほとんど破壊されているに等しい状態である。さらに遺跡全体を把握するため南北に20mのトレーニングを入れる。また、三段目の土堤のけずりが薄かったため重機により削平し、精査に入る。見事というべき漆黒土の落込みに、ここに焦点をしぶり調査することにして慎重なる精査をはじめる。トレーニング内の廃土から手、足、首をもがれた胴体のみの土偶が発見される。

○8月4日(土) はれ

本日より、主任と応援の調査者2名が参加し、いよいよ本格的な追込調査に入る。昨日に引き続き、J1号址のプラン確認をはじめたが土寄せ場に住居址がかかり、プランの全容がつかめないため重機をお願いして土を取り除いてもらう。

●茶臼山遺跡 全面漆黒土のためプランの把握が困難なために、東西・南北に十字の1m巾トレーニングを入れる。南北トレーニング内から、石冠、石剣、台付土器の台部等が出土する。

○8月5日(日) くもり

昨夜の雨のために茶臼山遺跡は水びたしで仕事にならないので、2班に別れていたが全員作業のしやすい明專寺遺跡へ移動する。

昨日、土を除けてもらったので、J1号址の平面プラン確認をする。ほとんど床面上まで掘り下げてあり、西側の一部分のみはっきりとした輪郭線が把握できる。ピットも検出され、実測も終了する。

残った、えーこ・1~3のグリッドを千鳥格子上に掘り下げる。えー2・3G内から、土塙2基、住居址一棟確認された。

○8月6日(月) はれ

昨日確認された住居址をJ2号址と命名し掘り下げに入る。また、おー1~3・かー1~3のグリッド掘り下げも昨日に引き続きおこなう。

○8月7日(火) はれ

昨日に引き続きJ2号址の掘り下げを続行。きー2・3・5、くー2・3グリッドの掘り下げを行なう。

また、本日より西小学校の図工室をお貸りして、土器洗い及び註記作業を開始する。

○8月8日(水) はれ

●茶臼山遺跡 遺構内の水が少し引けたので、茶臼山遺跡に移り精査に入る。しかし、水がたまっている箇所があり、ポンプで吸収するが、泥水となり作業に困難をきたす。全面黒色土で覆われプラン確認に大変困難をきたしているところを水害で更に厳しい条件になる。

東西、南北のトレンチを中心にして掘り下げを行なうながら精査を行なう。その結

果、これ以上精査してもプラン確認は無理であろうとの判断から、落ち込み全体を出来る限り丁寧に掘り下げを行なうことにして作業を続行。

尚、昨日より開始した、土器洗いを続行。

○8月9日 はれ

J2号址の掘り下げを続行。午前ではほぼ終了し、D2、3号の掘り下げに入る。また、けー3・5Gの掘り下げを行う。引き続き、J2号址の実測に入る。

他の一班による土器洗いと註記作業続行。

○8月10日 はれ

J2号址、土塙2、3号の実測および明專寺・茶臼山遺跡の全体実測、写真撮影を行う。また、昨日よりの残りの掘り下げを続行し、さらに、茶臼山遺跡で最後の精査をする。杭ぬき、あとかたづけをして、テント及機材の撤去作業を終り現場での作業を終了する。

西小学校で土器洗い及び註記作業をしていける班と合流し終了させる。

○9月1日~2月15日 調査団の各自が自宅に担当した遺物を持ち帰り、遺物実測、拓本、図面整理、原稿、トレス等を行なう。

○2月16日~21日 捕図作成、原稿清書、編集等の作業を牟礼村に調査団が集合し合宿を行なう。

○2月22日~4月20日 残りの遺物実測、原稿執筆、捕図、図版作成、原稿清書、総編集報告書刊行。

(島田 恵子)

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

牛札村は、長野市を中心から北へ10km余り、夏の間避暑地として賑わう野尻湖の南約8kmの地である。周囲には斑尾、戸隠、飯綱、妙高、黒姫の山々がそびえる。村全体の景観は、南側を三登山(923m)に、北側を飯綱山(1917m)に、そして東側を鳥居川が北西から南東へ流れ、村境を成す山地と丘陵に囲まれた盆地である。村の中央には飯綱山その他から流れ出る支流を合せて八蛇川が流れ鳥居川に合流する。合流点近くは、河岸段丘が発達している。

茶臼山・明專寺両遺跡は、ともに中央を流れるこの八蛇川沿いに立地しており、この内明專寺遺跡は飯綱山から流れ出る滻ノ沢を源流とする支流と八蛇川本流に狭まれ、茶臼山遺跡は八蛇川本流を狭んで明專寺遺跡の対岸に位置している。ともに川の深い浸食によって舌状台地的な觀を呈し、独立した丘陵状の微高地を成している。後にふれる層序からするとローム層の上に堆積している層の中に1mをこす礫が含まれており、こまかい礫がみられず、地形的に傾斜角度が大きいことを考へるならば、この付近一帯が地すべり地である可能性もある。

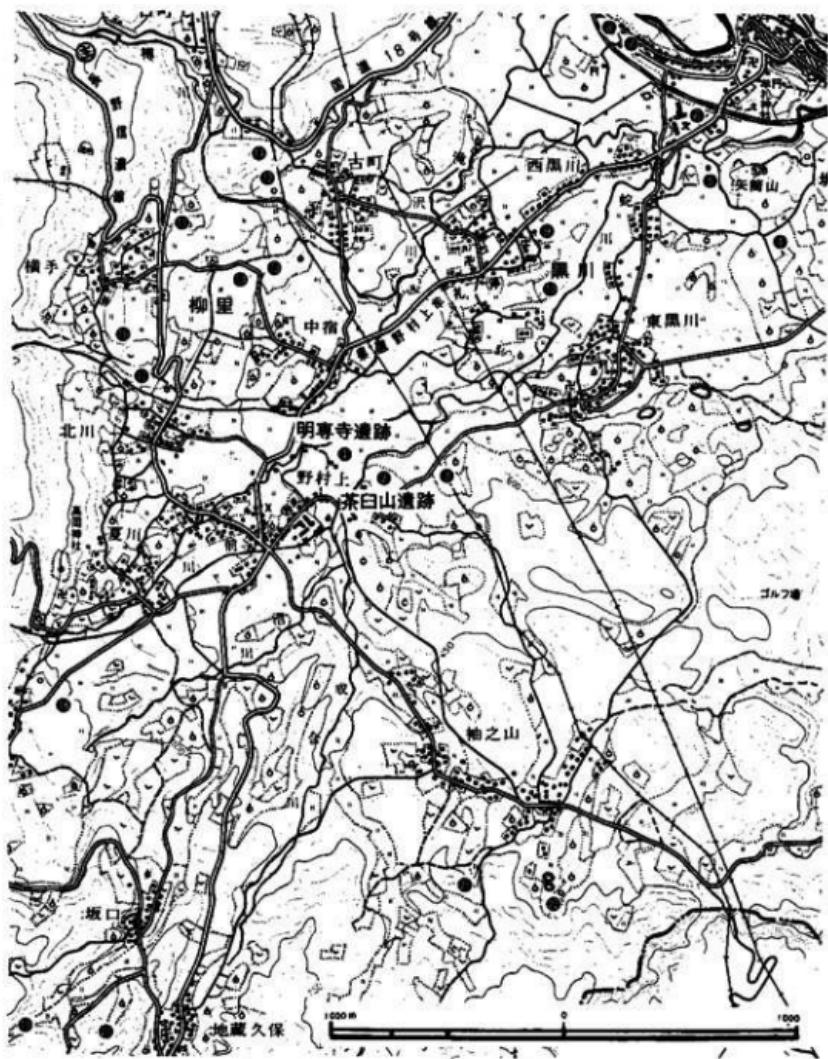
尚、遺跡周辺は平坦地がほとんどなく複雑な地形をもつため、湿田、畑地、果樹園等となり植物層の変化に富んでいる。両遺跡はともに湿田であった。

(宮城 孝之)

第2節 考古学的環境

牛札村における遺跡数は、旧石器時代遺跡1、縄文時代遺跡20、弥生時代遺跡8、古墳2、歴史時代の遺跡29を数える。周辺遺跡と一覧表には、明專寺、茶臼山遺跡をふくむ22遺跡のみを記した。

旧石器時代の遺跡は、中高山遺跡一ヶ所で、石刀、石核、彫刻器等が採集されている。縄文時代の遺跡については、早創期から晩期にわたって確認されている。水利は非常によいが、山間部の傾斜地の多い地形であるためか、比較的に遺跡は小規模のものが多いように思われる。昭和52年8月に緊急発掘調査を実施した丸山遺跡では、縄文時代早期後半の条痕文系の尖底土器、前期関山式土器とこの時期の住居址1軒、諸磯式土器、国分期の住居址3軒が確認されている。



第2図 明専寺・茶臼山遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	繩文	弥生	古墳	歴史	備考
1	明専寺遺跡	大字柳里	○				
2	茶臼山遺跡	大字川上字茶磨山1882	○				
3	強清水遺跡	大字黒川字強清水		○	○		
4	七削遺跡	大字車札		○	○		
5	裏町遺跡	大字車札			○		
6	庚申塔遺跡	大字黒川字庚申塔1610		○	○	○	弥生箱清水式
7	小玉遺跡	大字小玉	○		○	○	
8	西屋敷遺跡	大字平出	○		○		
9	前田遺跡	大字黒川字前田			○	○	
10	殿星敷遺跡	大字黒川			○		
11	石原遺跡	大字古町字石原829	○				
12	上ノ山遺跡	大字古町字上ノ山546			○		
13	下向山遺跡	大字古町字下向山	○	○		○	
14	大岩遺跡	大字柳里字大岩422-3	○				
15	蟹原遺跡	大字柳里蟹原	○				
16	南遺跡	大字柳里字南807	○				
17	横道遺跡	大字柳里字横道	○				
18	丸山遺跡	大字高坂字丸山803.804	○		○		绳文早期、尖底深鉢、闊山式、諾磯、加曾利B
19	上向遺跡	大字坂口上向206			○	○	
20	甘池遺跡	大字坂口字甘池12.117	○	○	○	○	前期南大原式、中期加曾利E式、土師罐分類
21	かつも原遺跡	大字袖之山字かつも原1045			○	○	
22	東久保遺跡	大字袖之山字東久保	○				早創期

弥生時代遺跡は、中期栗林式期の遺跡が一ヶ所あるほかは、後期箱清水式期の遺跡がほとんどである。村内では安定した広い水田可耕地を見つけるのは難しく、善光寺平の稻作地域からはかなり遅れて後期箱清水期になって大きな展開を見せ、国分期になって開発が進むものと思われる。

(宮城 孝之)

参考文献 「農業振興等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」(S 45 長野県教育委員会)

「牟礼丸山遺跡発掘調査報告書」(S 53.8 牟礼村教育委員会)

第3節 歴史的環境

7月28日～8月10日にかけて、明專寺・茶臼山遺跡の緊急発掘調査が行なわれ、その出土遺物は縄文後期～晩期に及び、そのうちの茶臼山遺跡は県下でも非常に調査例の少ない晩期の貴重な調査となったわけです。――

そこで、遺跡周辺の歴史を伝承を中心にしてふれてみたいと思います。

古墳時代、善光寺平に集中する前方後円墳は、この地方への影響はうすく、もとどり山東麓平出に三ヶ所程みられる。また、前高山の古窯跡はかなり地域的に広いように推定され、この地方の産業の発生地であるとおもわれる。

また、社園条里はみとめられず、水田開発はかなり遅れていたものとおもわれる。本遺跡の付近に古官道が通過しており、義仲にまつわる伝（碑文）がある。又、矢筒山近くに館跡が確認され（太田庄、島津）鎌倉期すでに小玉、黒河、野村上等の集落名がみられることから、歴史時代の遺跡が平出を含めてこの方面に多いことはうなづける。

さらに、本遺跡の近くに飯綱靈仙寺への信仰的通路が平出一黒川一中宿一新井坂に通じております、中宿には明專寺があり（三河から追われ一時ここに移った現在柏原の明專寺である）。今回調査された明專寺遺跡の字名も、ここが明專寺の寺領であったことを物語っている。

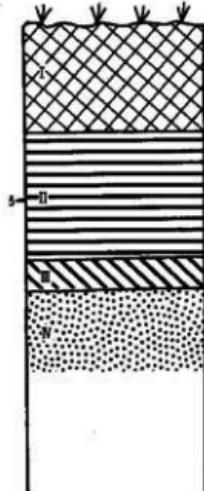
近世戦国の動乱は、甲越の戦で一足早くこの地方を巻込み、数十年の戦乱は中世文化の破壊をもたらした。其の後上杉以下領主武士の相津移封により、封建的な世状になりながら村落は自治制となり、北国街道が奉札宿と共に開かれ、揚水土木技術の発達と相まって急速に開田も進んだ。移入の人々も定着するようになり、近世末期ようやく現在の集落が形成された。

本遺跡の立地は、こうした重要な点にあり乍ら、八蛇川を含めた河川が乱流し、その流路を度々かえたことと、用水掘さく開田により破壊に近い最悪の条件にあった。

（井沢 信雄）

第3章 層序

明專寺遺跡



第3図 明專寺遺跡層序模式図

第Ⅰ層 厚さ約30cmの水田耕作土。

第Ⅱ層 厚さ30cm～50cmの粘質の強い黒色土層。細かい粒子で、遺物を多量にふくむ。また大きな礫をふくみ、その礫は形も様々で大きさも一定していない。(遺物包含層)

第Ⅲ層 厚さ平均10cmの粘質のある黒褐色土層。細かいロームの塊をふくみ遺物の出土はない。第Ⅱ層と同じく大きな礫をふくむ。所によってはこの層の認められない場所もある。

第Ⅳ層 ローム層(地山)

茶臼山遺跡



第4図 茶臼山遺跡層序模式図

第Ⅰ層 厚さ約30cmの水田耕作土。

第Ⅱ層 厚さ20cm余りの黒褐色土層。細かい粒子であるが粘性弱く、礫を多くふくむ。(遺物包含層)

第Ⅲ層 厚さ15cm余りの黒色土層。まっ黒な土で土器を多量にふくむ。第Ⅱ層に比べ粘性に富む。(遺物包含層)

第Ⅳ層 厚さ12cm余りの褐色土層。第Ⅱ層、第Ⅲ層に比べ細かい粒子で粘性に富む。(遺物包含層)

第Ⅴ層 レンズ状にわずかに認められる。第Ⅳ層よりさらに褐色の強い層である。遺物は少ない。

第Ⅵ層 矿をふくむ粘土層(地山)

尚、第Ⅱ層～第Ⅴ層は、遺跡中央で最も厚く、縁辺に行くに従ってうすくなるレンズ状の堆積である。

(宮城 孝之)

第4章 遺構と遺物

明專寺遺跡

明專寺遺跡で確認された遺構は、縄文時代後期の住居址2棟（J1号、J2号）、同土塙3基（D1号～D3号）である。

さらに、八蛇川沿いの土堤際に、4m四方に土器片が大量に集中していた地区が発見され、新たに調査区に加えた。土器片はダンボール4箱にのぼった。しかし、完形土器1個体の他は小中破片がほとんどを占め復原可能なものは1個体にすぎなかった。地形、土器片の集中範囲からして土器捨場的存在の遺構ではないかと考えられる。

1 住居址

1) J1号住居址

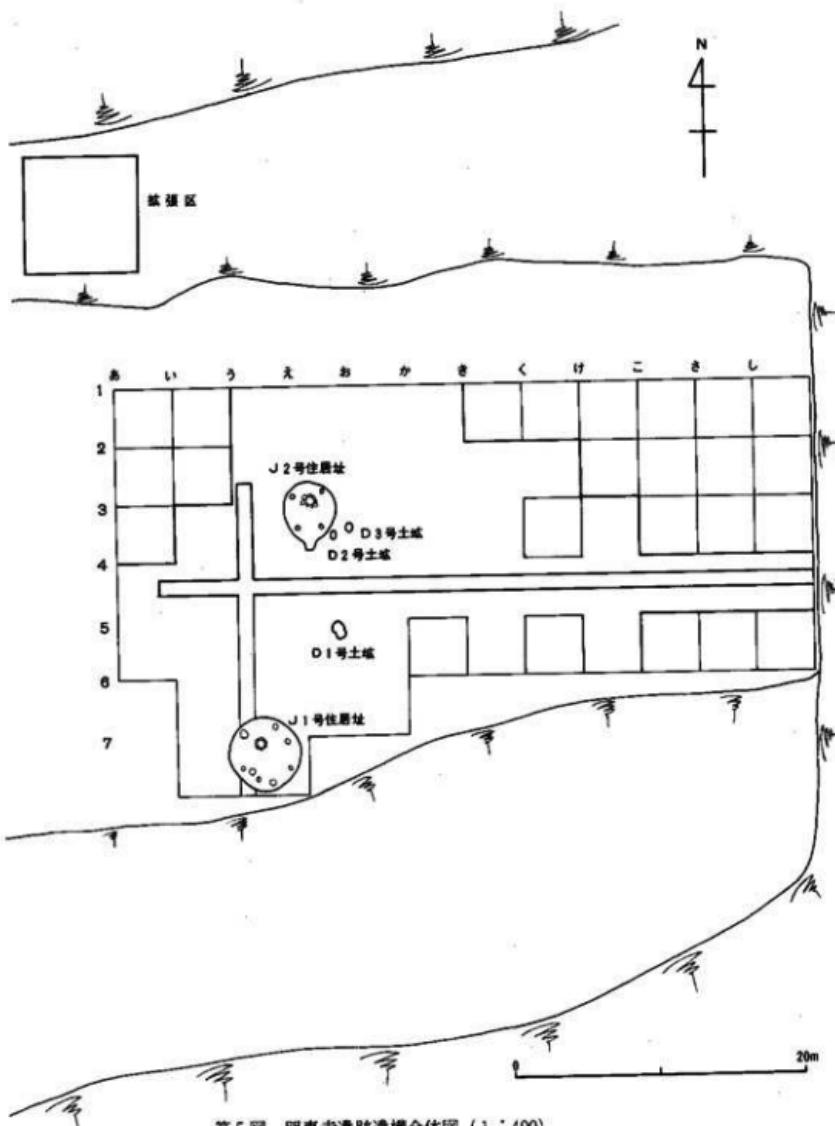
遺構（第7図）

本住居址は、調査区の最西南端に位置し、う・えー6・7グリッド内において検出された。プラン検出にあたっては、第6図に示した如く、一面に集石する礫群に覆われており上部での確認は不可能であったが、礫群のあい間から炉が検出されたことによって住居址の存在が判明し、最高直径1mにもおよぶ集石群を取り除く作業、さらに調査区の最端であったため、廃土が寄せ集められており、廃土の移動を行なうことによって、ようやくプランの全貌をつかむに至った。

平面プランは、西南コーナーの一部分に限りプランが確認できただけであったが、その部分及びピットの位置等から推定すると、東西6m、南北6mの円形を呈する住居址である。

主軸方向は、P₆の西側を入口部と考えると、ほぼ北を示す。覆土は粘質の強い黒色土層で覆われ、この下部にあった一面の礫群を取り除いた部分がすでに床面に達しており、遺物はほとんど残存していないかった。ピットは、8個確認されたが、P₁の規模は径30cm、深さ57cmであるが、P₂～P₈はそれぞれ深さが18cm～31cmと比較的浅く、特に西南側の床面はやや傾斜しており耕作土の床土直下であったため、開田の工事にともないすでに多少削平があったものとおもわれ、主柱穴と補助柱穴の判別はできなかった。

炉址は、中央よりやや北西側に位置し、6個の石によって六角形に組まれた、ほぼ橢円形状を呈する石囲炉である。炉内には、20cm×15cmの安山岩が中央から北寄りに配置されていて炉内に埋っていた石の面は、赤色化し長時間熱をうけていたものとおもわれる。炉内でなにかの



第5図 明専寺遺跡遺構全体図 (1:400)



第6図 J-1号炉付近の砾群集石状態 (1:20)

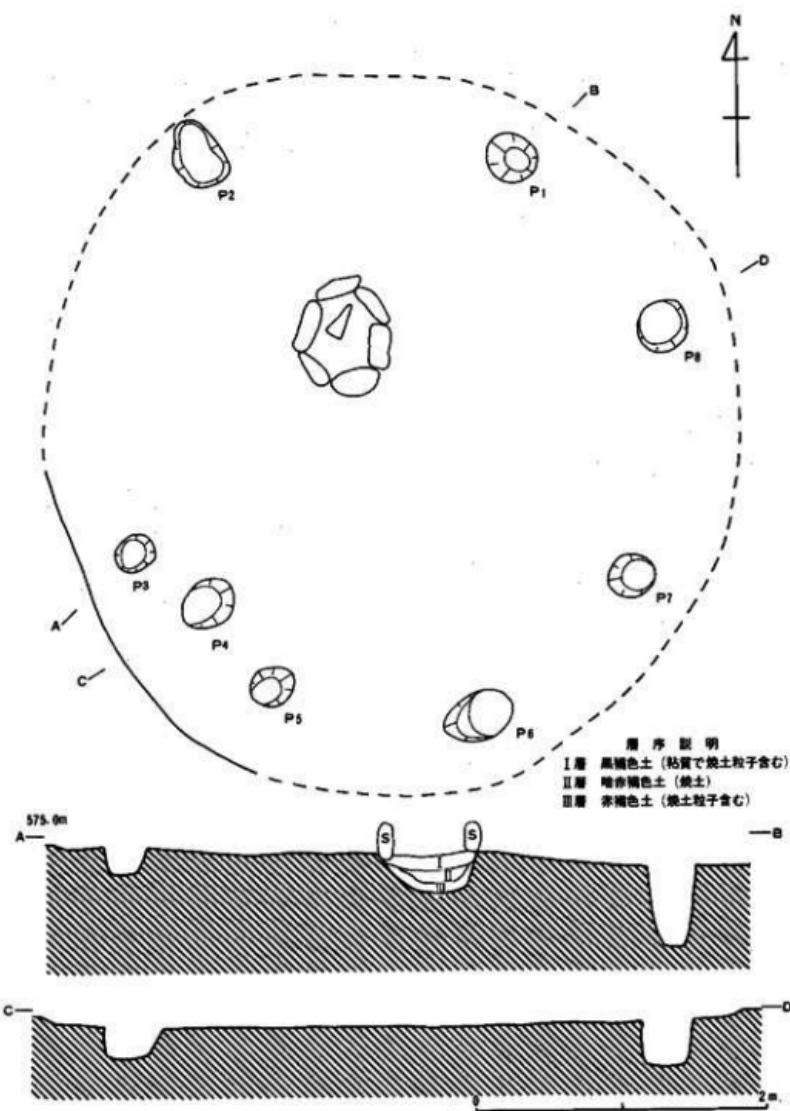
用途を果していたものであろう。

炉址内の焼土は、第7図の層序に示したように三層に分れてかなり厚く堆積していた。

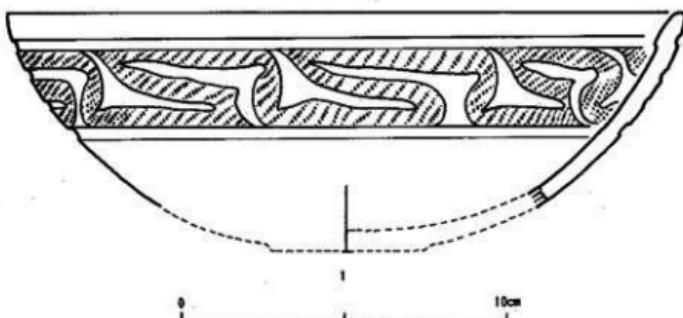
(島田 恵子)

遺物 (第8図)

推定される口径20.7cm、現存高7.4cmを計る浅鉢形土器で、底部はやや凸出する平底を呈する。また、土器の厚さは、0.5mと薄い。焼成は悪く、胎土には大粒の砂粒を多量に含み、赤褐色の色調を呈する。文様は巾約3cmの口縁部文様帶のみで、他は無文となる。



第7図 J-1号住居址実測図 (1:40)



第8図 J 1号住居址出土遺物実測図（1：2）

口縁部文様帶は、巾の太い2本の沈線を二条横にめぐらし、その内側を2段のL Rの繩文原体を口縁部から底部へと縱にころがす。このうち沈線による三叉文を上下2段を逆方向に入組ませ、それぞれの三叉文は連鎖的に結ばれる。このため、地文の繩文が浮き出る箇所を見るといわゆる「工字文風」の様相となる。

本住居址出土の土器は、図示した以外では無文の小破片が数点のみ出土した。本土器は、住居址南西隅、P4附近より出土した。

出土状態は、破損した土器を一括して投げ捨てたような状態で、住居址覆土に混入した礫の上から出土した。したがって、住居址床面直上からの出土ではなく、住居址廃棄後、何らかの形で礫群といっしょに混入したものと思われる。

本住居址の時期を図示した唯一の有文土器から考えると、繩文時代晚期中葉の時期と考えられる。しかし、土器の出土状態や、明專寺地区が、繩文時代後期初頭から中葉にかけての単純遺跡であり、また、八蛇川対岸の茶臼山遺跡が繩文時代晚期初頭から後葉の単純遺跡である点など、両遺跡全体の調査結果を考慮に入れると、繩文時代晚期中葉の住居址という結論を出すには、積極的な根拠に乏しい。

(森 尚登)

2) J 2号住居址

遺構（第9図）

本遺構は、う・えー2・3グリッド内において検出された。平面プランは、長径4m 60cm、短径3m 60cmでほぼ円形を呈するが、南側に突出部をもつ柄鏡形の住居址である。主軸方向は南側突出部を入口と考えると、N-10°-Wを示す。

壁は、北壁15cm、東壁27cm、南壁19cm、西壁25cmで垂直に近い状態で立ち上っている。床面は、炉石のレベルとはほぼ同じではないかと思われるが、明確な床面の検出はできなかった。

主柱穴は、P₁ 24×28-25cm、P₂ 28×30-50cm、P₃ 24×?-17cm、P₄ 26×40-25cm、の4個と思われるが、突出部のピットに関してはその性格等不明である。

炉址は、埋甕炉でありこの埋甕炉の土器は二つ重なっており、かなりの二次焼成を受けていて、外側の土器は取り上げると同時に砕けてしまい、復原は不可能となってしまった。また、埋甕炉のまわりには、非常になめらかな平石を敷きつめており、これらの平石は、埋甕炉のまわり以外では検出されなかった。炉底は丸底で、焼土は埋甕炉内の全面に見られる。この住居址の覆土中からもかなりの量の焼土が検出されている。

埋甕炉のまわりの敷石以外に見られた石は、ローム中にしっかりと埋まっているものばかりで、当初から存在したものと思われる。住居址内西側半分に二列に並んだ石が存在するが、すべてローム層中にしっかりと埋っており、まったく動かない。これらの石がいかなる性格のものであるのかは不明である。

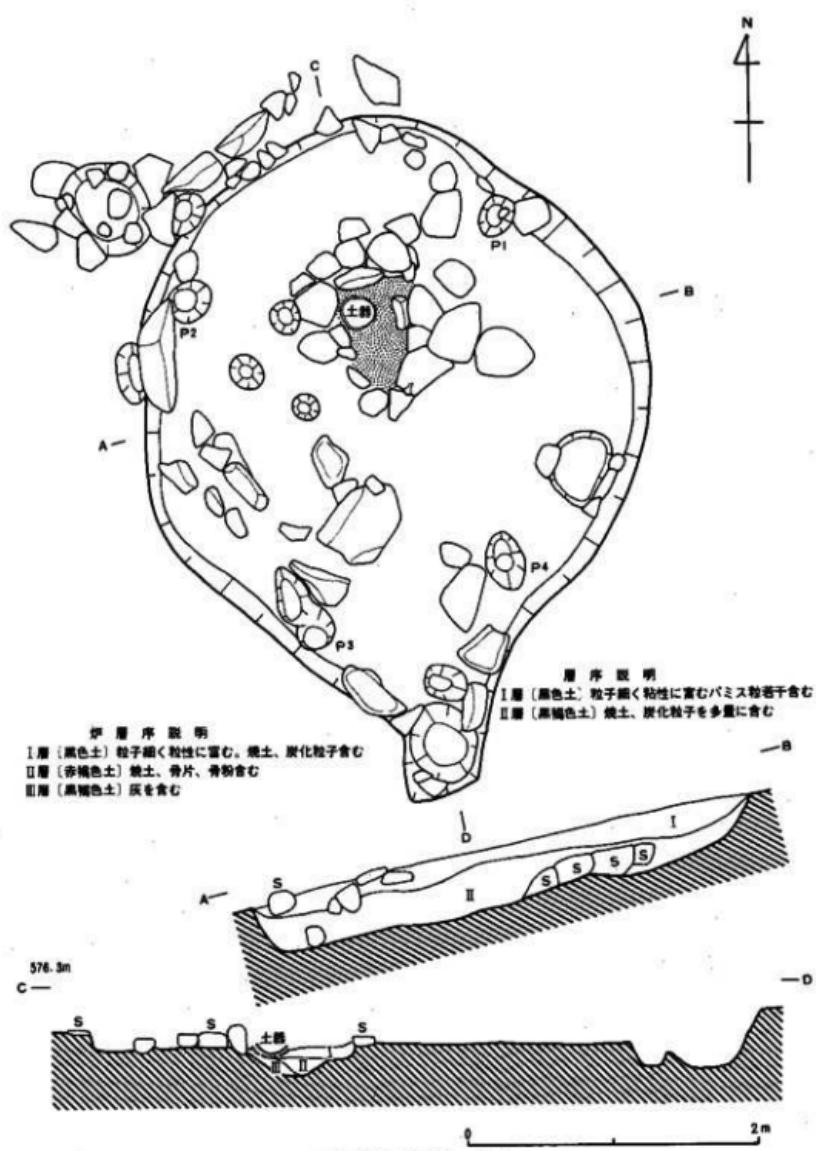
また、住居址外北西にかけて二列に並んだ石も上記のようにしっかりと壁際に埋っており、住居址にともなうものとして、ピットとともに図示した。ピットは直径60cm、深さ50cmで遺物の出土はまったくなかった。

遺物は、埋甕炉付近に多く、南側からはほとんど出土していない。石器の大部分は北側に片寄って出土している。埋甕炉と北壁の間で大珠とミニチュア土器、各一点が出土しており特筆すべきことであろう。また、覆土中より骨粉がかなり多く見られたが、資料とするだけのものは出土していない。

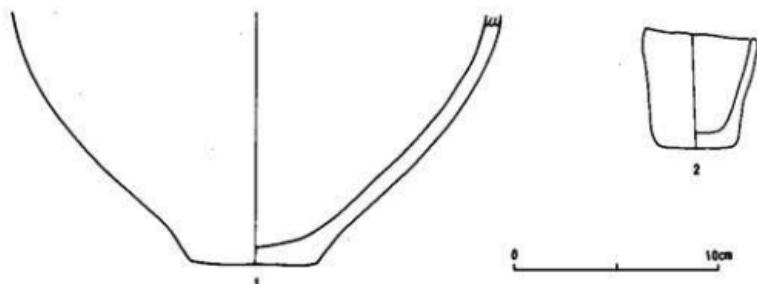
(宮城 孝之)

遺物（第11図1・2・第12図）

第11図1は、現存口経24cm、現存高12.4cmを計る深鉢形土器の胴下半部である。厚さ0.7cmとうすい。胎土に砂粒を多量に含み色調は黄褐色を呈する。本土器はJ 2号住居址石囲い炉址の埋設土器であるため、度重なる火力によりボロボロとして取り上げが困難な状態で出土した。本土器の上にさらに深鉢形土器の大破片が重ねられていたが、これについては、風化が進み、復原して図版に組むことができなかつた。また、土器の割れ口はきれいに研磨されており、炉址埋設用に二次加工されたことは明らかである。



第9図 J-2号住居址実測図 (1:40)



第10図 J 2号址出土物実測図 (1:3)

2は、口径 5.6cm、器高 6.0cm を計る完形土器である。住居址の北すみの床面直上から出土した。胎土には、大粒の石英粒、雲母粒、砂粒を多量に含み焼成は良い。色調は黒褐色を呈するいわゆる手捏土器で、置くと口縁部が斜になり、体部も凹凸がはげしい等粗雑な作りである。器面は最初に櫛状工具により横に調整され、その後ヘラ状工具により縦に研磨されている。器面に凸凹が多いため、所々に櫛状工具の調整痕が残る。器面内側は5条約 1.5cm巾の粘土紐の巻き上げ痕が消されずに残っている。底部のつけ方は、平な底部を作り、その上に粘土紐を輪積にして行ったことが観察され、調整は器面と同じ工具によるが、全て横方向に行なうこと異なる。

第15図12は、深鉢形土器の胴部破片である。色調は黒褐色を呈し、胎土は緻密で焼成も良い文様は刻み目を持つ蔭帯を垂下させ、それを沈線による同心円状の弧線で取り巻くものを単位とする。この単位文様間をさらに蕨手文や三角形を基本とする沈線によって区画する。区画された沈線間は地文が磨消される。

本住居址出土土器は以上3個体のみである。第11図1は無土器ではあるが、胴部が「く」の字状にくびれ、最大径が胴下半部にある点を考えるなら、堀ノ内式期の古式の様相を呈する。また2の手捏土器も縄文時代後期から晩期にかけてたびたび出土する。第15図12は、太い沈線による文様区画によって文様が構成される深鉢形土器である。2はその普偏性ゆえに時期を考える資料にはならないとしても、1、には堀ノ内I式期の深鉢形土器の特徴を保つている。これらの理由から本住居址の時代を縄文時代後期、堀ノ内I式期に比定する柄鏡形の住居址と考えたい。

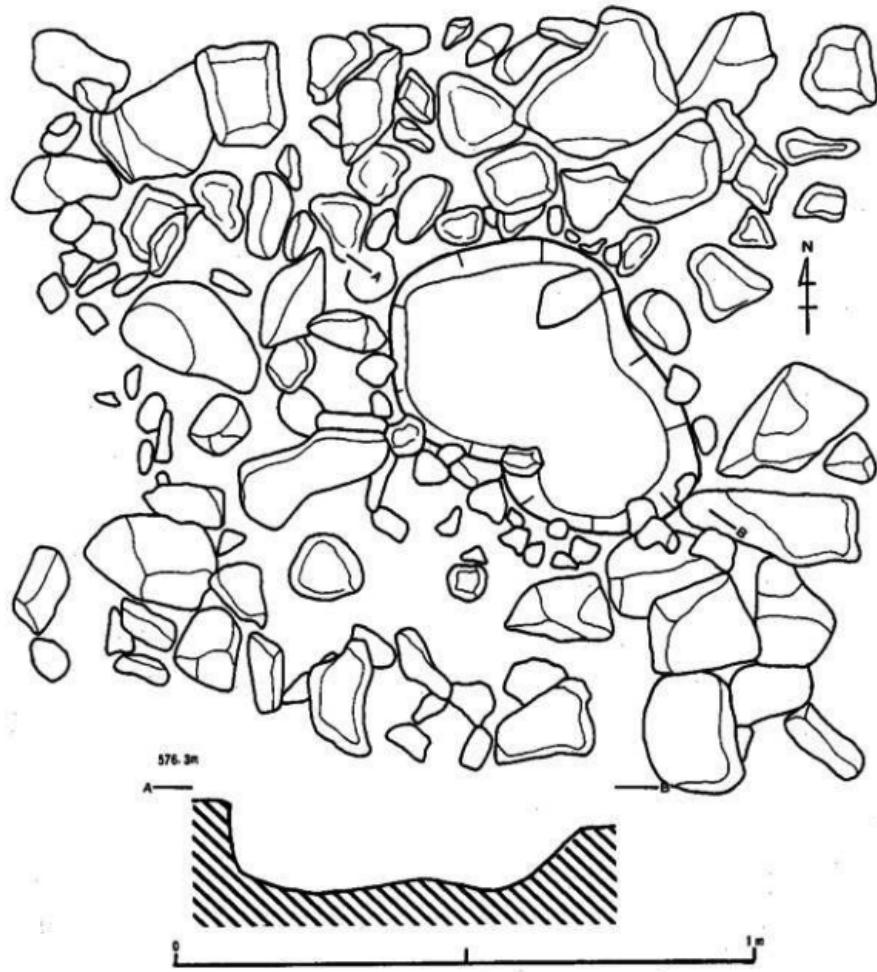
その他の遺物としては、磨製石斧7点、凹石15点、槌石1点等が出土している。残念ながら、この石器からは本住居址の時代を特定する積極的な根拠を出し得ない。

(森 尚登)

2 土 坡

1) D 1 号土坡 (第11図)

本造構は、えー5グリッドより検出された。特にう・え・おー5・6一帯に山石（安山岩）



第11図 D 1 号土坡実測図 (1 : 20)

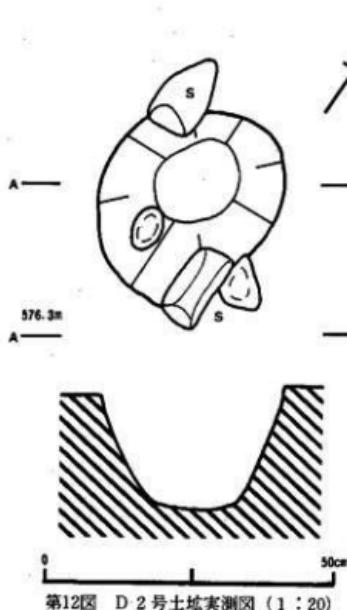
の礫群が密集しており、その集石を取り除いて構築された模様である。

平面プランは、長径120cm、短径70cmを計測し、中央部でやや凹んだひょうたん状の橢円形を呈す。主軸方位はN-54°Wを示す。壁は、北西側が急傾斜で立ち上り、南東壁はなだらかに立ち上っている。最深部は確認面より32cmを測るが、中央のやや凹んだ部分の底面がそり上っており28cmを測る。

東西両壁中央の底面上に、直径26cmと14cmの石が存在し、石の上部壁面にそれぞれ1.5cmの炭火材が付着していた。覆土も少量はあるが炭化粒が入り混っており、人為的堆積であろうともわれる。また、土括内底面にうすく付着していた灰褐色の粒子、本遺構の規模等からして土括墓的性格を有しているのではないかと思われるが、明確なところは捉えられなかった。

本遺構から遺物の出土はなかったが、J 1号住居址の廃絶後で、地すべりによる集石群のできた後の構築であり、J 2号住居址およびD 2号・3号土塙と同時期のものではないかと考えられる。

(島田 恵子)



第12図 D 2号土塙実測図 (1:20)

2) D 2号土塙 (第13図)

本遺構は、J 2号住居址の南東面に隣接した、えー3グリッドより検出された。

平面プランは、長径66cm、短径62cmを測りややゆがみはあるが、ほぼ円形を呈す。主軸方位は、N-33°Wを示す。確認面からの深さは40cmを測り、壁はなだらかに立ち上ってなべ底状の形状を呈している。

北壁、南壁の立ち上り際に、直径30cm~20cmの安山岩3ヶが存在し、なお西壁沿いには直径14cmの安山岩がしっかりと壁にくい込んでいた。また、北壁、南壁の立ち上り際に存在していた安山岩も共に土に密着しており、本遺構にともなう配石であると考えられる。

しかし、本遺構からの遺物出土は皆無であり、性格、用途等を決定する所見は得られなかった。

(島田 恵子)

3) D 3 号土塙 (第14図)

本遺構は、J 2 号住居址の東側、D 2 号土塙の北東側に隣接した、え・おー 3 グリッド境より検出された。

平面プランは、長径92cm、短径64cmを計測し、楕円形を呈している。主軸方位はN-15°-Eを示す。

壁は、比較的急な傾斜をもって立ち上っており、最深部は確認面より52cmを測り、隣接したD 2 号土塙に比べて規模は一まわり大きいようである。南壁の立ち上り際に直径40cmの安山岩

が、しっかりと密着して存在している。

さらに、東南側の立ち上りに沿っても、18cmと12cmの安山岩が、これもしっかりと壁にくい込んでおり、D 2 号土塙と同様な状態であった。

よって、本遺構にともなった配石と考えられ、なんらかの用途的存在を果したものであろう。

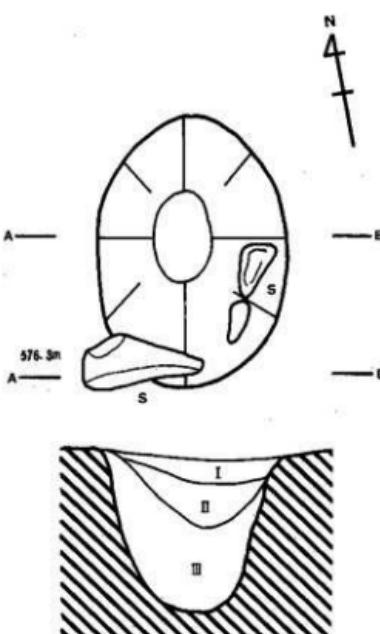
覆土は、黒色土を基調とした3層に区分された。

第1層と2層は、粒子はあらく、ローム粒子を多量に含んでいた。

第3層は、粘性に富みきめ細く、3層の中ではもっとも黒みがかり、ローム粒子はほとんど含まれていなかった。

本遺構からの出土遺物等はなく、どのような用途をもつ性格の遺構なのか不明であるが、J 2 号住居址、D 1 号、D 2 号土塙とともに、同時期に構築されたものであろうとおもわれる。

(島田 恵子)



層序説明
I層 黒褐色土 粒子あらく、ローム粒子含む
II層 黒色土
III層 濃黑色土 粒子細く粘性に富む

第13図 D 3号土塙実測図 (1 : 20)

第5章 包含層出土遺物

1) 土器及び土製品（第14図1～3、第15図1～11、13～41）

第14図1は、推定口径24.0cm、現存高26.0cmを計る。器形は、頸部が「く」の字状にくびれ、胴部中位に最大径をもつ深鉢形土器である。焼成は良好で、胎土には大粒の石粒を多量に含むため器面全体がざらざらした感を呈する。色調は黄褐色である。

文様は、全体が櫛状工具による細い波状沈線によって施文される。頸部に一条横走し、以外胴部はゆるやかに縱走する。胴部の波状沈線は、3～4条の単位で施文されるが、なかには5条のものも見られ、規則性がない。

本土器のように、櫛状工具を用いて波状沈線を施すのみで文様を表す手法の土器は、縄文時代中期終末から堀ノ内初頭まで広く判出しているが、器形や他の出土土器から、縄文後期堀ノ内Ⅰ式期に伴う粗製土器と思われる。出土地点は「かー5」グリッドで、横位につぶれて礫群の間から出土した。

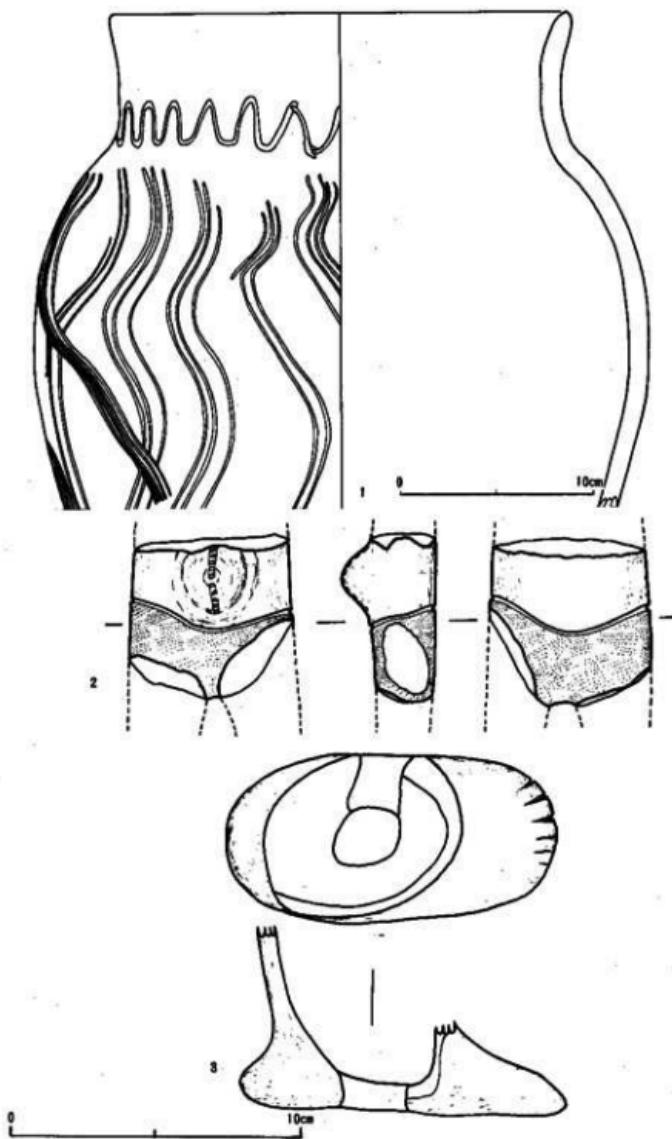
第14図2・3は、土偶の破片である。2は、長さ11.3cm、巾5.9cm、現存高6.3cmを計る土偶の足で、焼成は良いが、胎土には石英粒など大粒の砂粒を多量に含み、黄褐色の色調を呈する。文様は無く、全体を丁重に研磨するのみであるが、指先を意匠するためにヘラ状工具による6本の刻み目が入る6本指の土偶である。足の大きさや、中空の足頭を考えると、胴部を着けるにはあまりにも足が大きすぎる。このため足を意図した土偶と思われる。足の裏には縄代痕をかすかに残す。出土地点は、「おー5」グリッドであり、半分に分かれ、50cmぐらい離れて出土した。

3は、土偶の胴体破片である。巾6.5cmを計り、腰に向ってややその巾が広くなる。現存高は5.5cmである。本土偶の特色は、腹部に2.5cm巾の凸出を持つことであろう。この位置での測面の厚さは3.3cmとなる。焼成も良く、胎土も緻密で、黒褐色の色調を呈する。

文様は、腰と腰を一本の沈線を横にめぐらすことにより区画し、胴部の凸出した腹には、縦に10個の刻み目を烈する。腰以下は、無節L繩を上から下へと転がす。腹部の刻み目、沈線による区画等から縄文時代後期初頭から中葉にかけての土偶と考えられる。残念ながら表面採集によって得られた資料のため、遺構との関係は不明である。

称名寺式土器（第15図3・4）

口縁部が直立かやや外反し、胴部に最大径を持つ深鉢形土器である。色調は黒褐色を呈し、



第14図 明専寺遺跡包含層出土土器及び土製品実測図（1は1：3、2・3は1：2）

胎土は砂粒を多量に含み焼成も悪い。文様は巾の広い2本の沈線によって区画される。沈線で区画されたこれらの文様の中には、烈点文が施される。

三十種葉式土器（第15図5）

1片の出土のみであった。頸部が「く」の字形に外反し、胴上部に最大径をもつ深鉢形土器と思われる。色調は黒褐色、胎土は砂粒を多量に含み粗く、焼成も悪い。文様は竹管状の工具による刺突のみが烈状に施文されるのみである。搬入品である。

堀ノ内式土器（第15図1～3、6～17）

器形は、15が浅鉢で、それ以外はすべて波状、平縁の深鉢形土器と思われる。文様は地文に縄文をもたないもの（7・9・10・18・19）、もつもの（1～3・11・13～15）がある。地文に縄文をもつ土器の文様構成は、沈線による渦巻か同心円状の文様を単位としているもの（12・14・15）と垂下する 垂文のみのもの（10・11）、三角形など幾可学的な文様を施すもの（1～3・18）等がある。無文に縄文をもたない土器の文様構成も文様をもつものと大差ないが、8のように櫛状工具により波状の沈線を施すものもある。色調は黄褐色か黒褐色を呈する。胎土は全般に粗く、焼成もよくない。

加曾利B式土器（第15図18～37）

器形は、平縁で深鉢形を呈するもの（18～23）、波状口縁で深鉢形を呈するもの（28～30・37）、平縁の浅鉢形（15）、波状の浅鉢形（28～30）、急須形（24～27）を呈するもの等がある。文様は、横走する沈線を「S」字状の刻み目で区切ったり、上下を結ぶことを基本文様とするものが圧倒的に多い。これらの土器は、加曾利B I式といえよう。

上記以外の文様構成の土器は、32～37で「S」字状の刻み目を施さないもので、独自の文様構成となる。32・33は曲線的な沈線で文様の区画がなされ、35は頸部の横走する沈線以下斜めの沈線で埋める。34・36・37は、沈線以下縄文と無文になる。これらの土器は、加曾利B II式以降の土器といえよう。

加曾利B式土器は、焼成も良く、胎土も緻密であり、色調は黄褐色・黒褐色を呈する。土器の厚さも平均 0.5cmと薄くなる。

縄文晚期初頭から中葉の土器（第15図39～41）

包含層中より出土した同期の土器は、3片のみの出土であった。器形はいずれも深鉢形を呈するものとおもわれる。色調は黒褐色で胎土、焼成とも良好である。39・41の文様は、沈線による入組み文が主文様となっている。40は横走する沈線によって区画がなされ、胴部文様に「S」字状の沈線が連鎖する。39・41は、大洞B式期に平行するもので、40は大洞C式以降のものと思われる。いずれも、ローカル色豊かな地方の土器である。

（森 尚登）



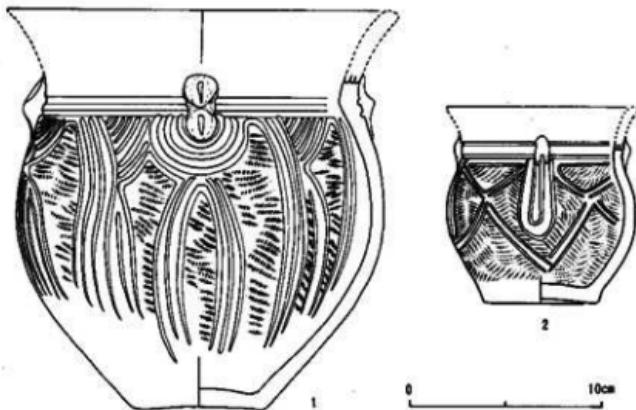
第15図 明專寺遺跡包含層出土土器拓影 (1 : 3)

北拡張区出土の土器（第16図1・2）

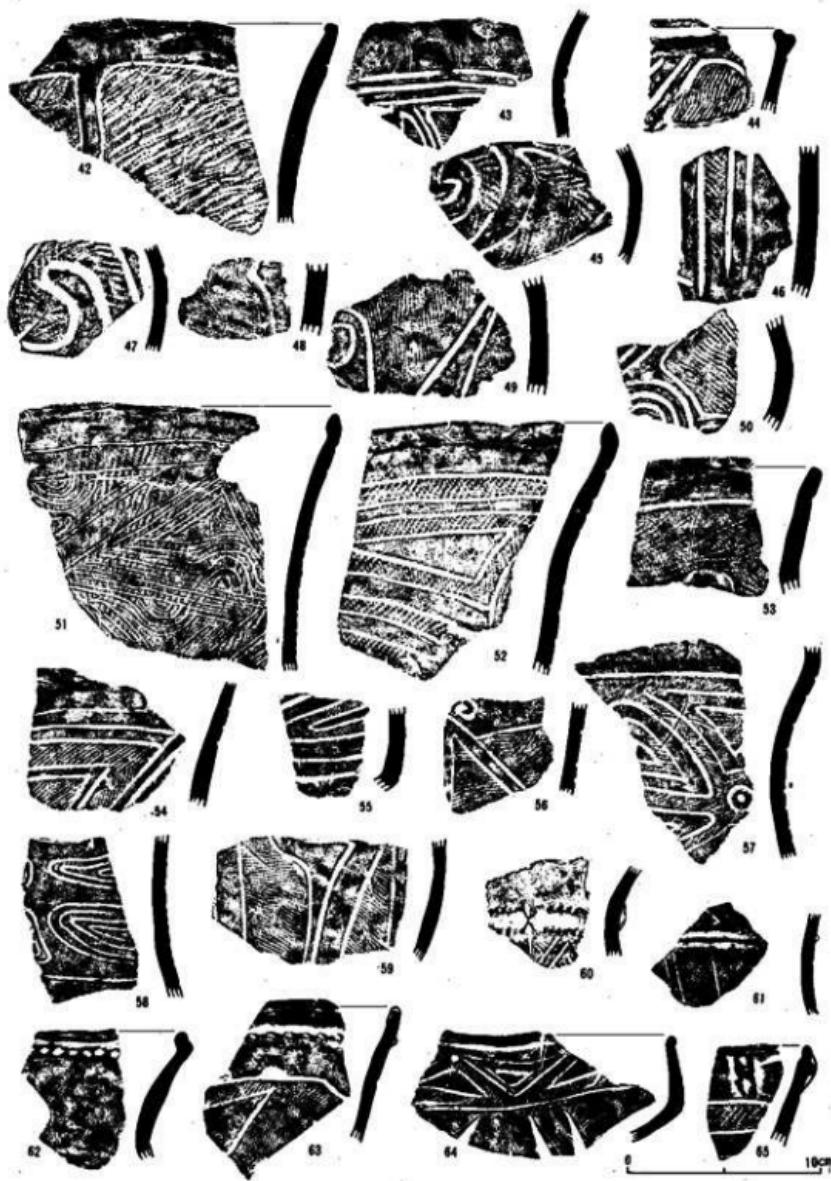
1は、現存高17.4cm、推定口径20.0cmを計る。器形は頸部が「く」の字形にくびれ、胴部中央に最大径を持つ深鉢形土器である。文様は地文に縄文を持ち、「8」の字状の突起により4単位をなす。頸部と胴部を横走する2本の沈線で区画し、文様は胴部に集中する。胴部文様は「8」の字状の突起を中心に全て弧線により表わす。この中心文様間は、さらに弧線や懸垂文で埋められる。典型的な壺ノ内I式の深鉢形土器と思われるが、様式遺跡のある関東地方の土器と比べ、器形が押しつぶされたようであるところがやや異なる。この特色は北関東から中部地方にかけての同時期の器形の特徴といえるかも知れない。

本土器は北拡張区の4面に集中して出土した土器片のなかからは唯一の完形土器である黒色土中よりの出土でピット等確認できなかったが、いわゆる埋葬的な出土状態であった。口縁部を下に、底部を上に向けていた。また、口縁部の欠損ヶ所は研磨されていて、意識的に特定な土器として使用されたものと思われる。さらには土器内からは、細くくだけた骨片が（1cm×2cm）2片確認されたが、人骨であるかは分析していない。また、本土器の上面からは、おびただしい量の土器片が散乱状態で出土している。

2は、おびただしい量の土器片の中で、唯一復原可能であった土器である。推定口径10cm、器高10.3cmを計る小形の深鉢形土器である。文様は、頸部と胴部を横走する2本の沈線で区画し4ヶの突起をこの沈線に粘り着けることによりそれが単位となる。突起直下に「u」字状の懸垂文を施し、単位間は三角形を基本とする、2本の沈線で結ぶ。地文には縄文を持ち、沈



第16図 北側拡張区遺構出土遺物実測図（1：3）



第17図 明尊寺遺跡北拡張区出土土器撮影1 (1:3)



第18図 明寺遺跡北拡張区出土土器拓影2 (1:3)

線のみが消磨される。

北拡張区は、以上の土器と後述する大量の土器が出土している。台地が切れる突端に位置し土器捨て場の様相が見られる。また、土器が捨てられる以前は、埋葬が埋葬される墓地的な様相をも示している地区とも考えられよう。

北拡張区出土の土器片（第17図42～65、第18図66～91）

ここでは、北拡張区出土の土器片について説明する。出土土器の様相は、同明專寺地区遺物包含層中よりの出土土器片と大差はないが、ことに加曾利B式期の遺物が極端に少ないことが特徴といえよう。

第17図42は、平縁の深鉢形土器である。色調は黄褐色で胎土も緻密で焼成も良い。文様は沈線による「人」字状の区画を単位とするもので、その内側は2段のLR繩文で充填される。それ以外は全て摩り消される。本土器は、明專寺遺跡出土遺物の中で最も古い、加曾利E式最終末の土器といえよう。

第17図43～59、60・61・63・64、第18図67～91は、すべて堀ノ内式期の土器である。これらの土器をさらに分類すると、43～51、56～59、67～91は堀ノ内のI式、52・53・60・63・64は堀ノ内II式、62・65は加曾利B II式以降の土器といえよう。器形は、平縁の浅鉢、深鉢、波状口縁の深鉢、突起によるゆるやかな波状を呈するものなどがある。色調は、黄褐色から赤褐色を呈し、胎土は比較的粗く焼成も劣悪である。

堀ノ内式期文様は、胴部に集中するものとして、43～50、54～59、88～91が上げられる。胴部文様は、45～49が渦巻を中心に施され、50・88・89は同心円状の沈線による弧線がその中心文様となる。その他の土器は、三角形など、幾可学的な文様が口縁直下から器面全体に施される。

66～87は、すべて地文に繩文をもたない土器群であるが、66～70、75～79・81はすべての文様を沈線を施すことにより表現させている。71・72・81・86は、文様の区画を刻み目のある陸帶により行う土器である。それぞれ三角形等幾可学的な文様構成になると思われる。70～77・80・82～85は浅鉢形土器となろう。

加曾利B式期の土器である。62・65の文様は横走する沈線による区画が主文様となる。これらの土器は、「8」字状の区画が施されない土器であり、加曾利B II式以降の土器といえよう。

（森 尚登）

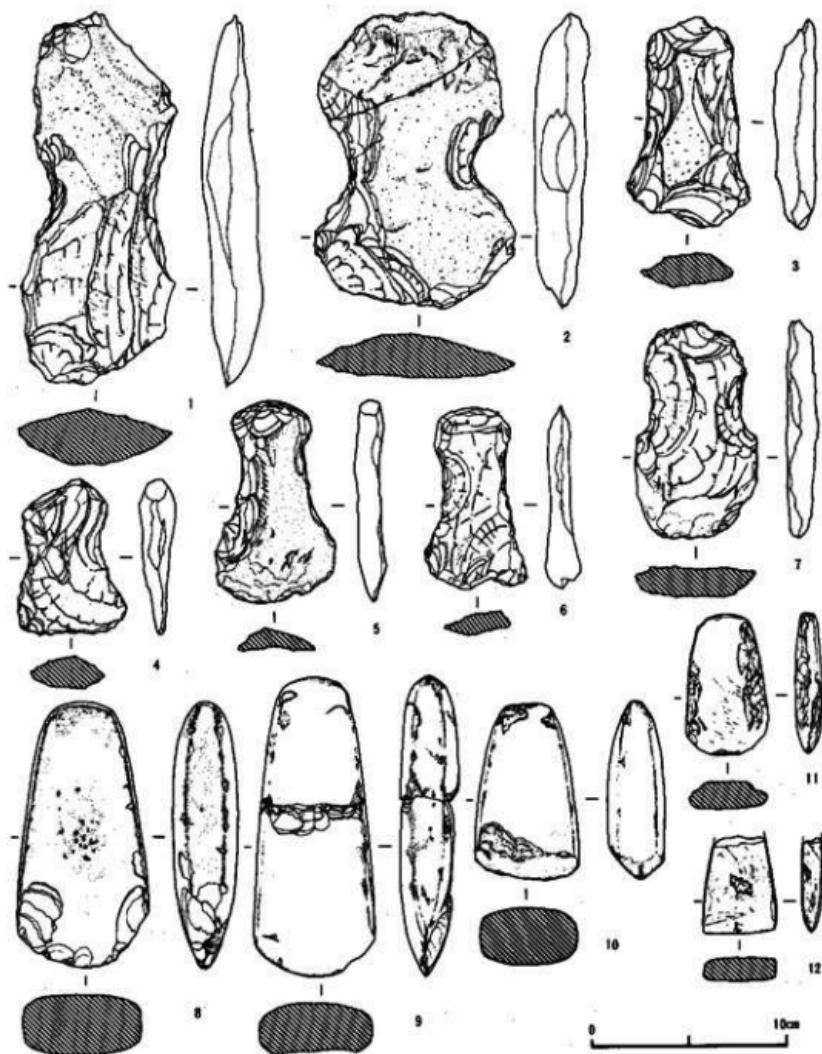
2) 石器 (第19図1~12、第20図1~7、第21図1~7)

打製石斧 (第19図1~7)

本遺跡出土の打製石斧は9点を数え、分銅形(1・2)、楔形(3~7)の2つのタイプがある。すべて珪質泥岩製である。1は表裏両面及び側縁に自然面を残しており、素材は楕円形の偏平礫であったことがわかる。表面を9回剥離した後、裏面に上端から9回の剥離がなされている。裏面には下端部からの剥離はない。両端の刃部に偏平礫のカーブと自然面のなめらかさを利用し、長大な分銅形を呈する。2は大きな円礫を半截して加工している。裏面は風化が進んでいる。表面は自然面をそのまま残し、上端の刃部は円礫のカーブを利用しておらず、括れ部のみ加工している。下端部の大きな剥離は階段状剥離をなしている。形態は1に比べて巾広く短い。表面の左側括れ部とそれに接する自然面には柄ずれによると思われる磨耗が見られ、上端の刃面には主軸方向の短い線状痕がある。1、2共に重量は400g以上を計り、また素材の特徴をよく生かしたものである。尚、2はマキヤマチタニ化石を多く含み、地質学上でも価値のある資料と言える。3は裏面の右半に自然面を、表面の中央には自然剥離面を残し、板状の素材を用いたと思われる。括れ部には着柄痕と思われる磨滅が見られ、矢印部分は顯著である。刃部は両面ともやや磨耗する。若干反り身である。4は長さ8cmの小型品である。頭部は偏平礫の端を利用しておらず、裏面はわずかに磨耗する。表面の胴部中央の稜線がかなり磨滅しているのに対し、刃部は裏面に若干の磨耗が見られるだけである。5は頭端部と表面に自然面を残し、裏面は自然剥離で、刃部のみ加工している。両側縁及び胴部の表面の稜線はかなり磨滅している。6は頭部の一部が剥落し、両側縁が磨滅している。反り身である。7は裏面が風化している。表面の頭部には着柄痕と思われる磨耗が見られ、括れ部以下は周縁が著しく磨滅している。3~7は平均約100gを計り、1、2との間には重量の点でも大きな差がある。

磨製石斧 (第19図8~12)

磨製石斧は19点にのぼっており、すべて定角式に分類される。8、9は大型品で典型的な蛤刃をもつ。8は安山岩製でかなり厚味があり、430gを計る。刃部の両肩を剥落している。9は半折状態で出土した。砂岩製で、長さ15.4cm、400gを計る。穂の一端と頭部が荒れている。裏面は折損部から下が大きく剥落しており、表面では折損面の角を数回敲き落として再加工している。楔としての転用が考えられるが、折損面に敲打痕等は認められず、再利用せずに廃棄されたと思われる。10は刃部の折損又は著しい磨滅の後の再加工又は再利用品と思われ、刃面は磨滅して鈍角をなし、裏面では鏽をつくっている。偏刃を呈す。流紋岩製である。11は鉄蛋白石製で、長さ7.3cm、70gを計る小型品である。両側縁に敲打整形の痕跡を明瞭に残す。12も小型品で凝灰岩製である。頭部を欠損している。8~11はいずれも両刃、円刃を有し、刃縁は磨耗しているが、本例は片刃状で直刃を有し、刃縁は鋭い。

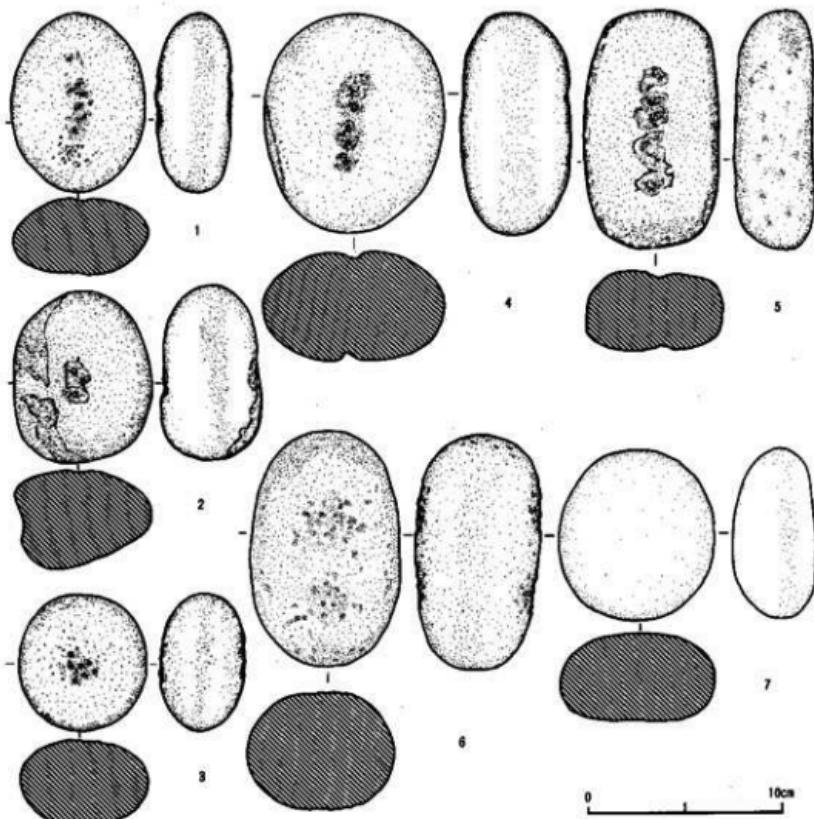


第19図 明尊寺遺跡出土石器実測図 (1 : 3)

凹石 (20図1～6)

本報告において、凹石と磨石は、磨痕をもつものでも凹み、アバタ状痕等が認められるものは凹石、磨痕のみのものは磨石として分類した。

1～6は、手頃な安山岩を用い、表裏両面に磨痕をもつという共通の特徴がある。1は平面断面とも橢円形の形状を呈し、両面とも中央に2個の隣接する非常に浅い凹みをもつ。2は、平面橢円形、横断面が不定な三角形を呈する。両面の中央に浅く小さな凹みが2個ずつ接して並ぶ。凹みの表面は滑らかである。裏面から表面にかけて、主軸方向に表皮が帯状に浅く剥落

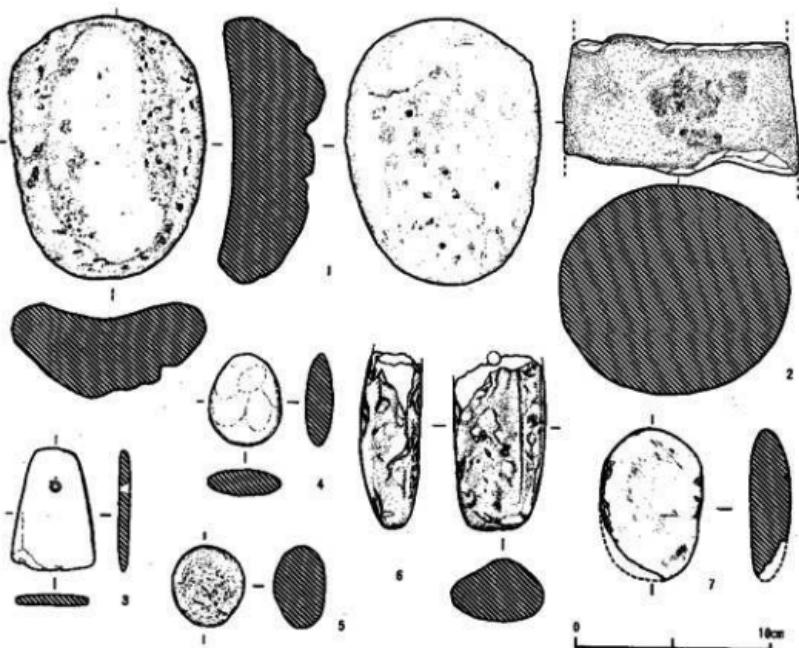


第20図 明専寺遺跡出土石器実測図 (1:3)

しているが、使用痕ではなかろう。1、2はJ-2号住居址覆土上部からの出土である。3は平面円形、断面橢円形の非常に整った形状を呈し小型である。周縁も磨られて滑らかで、両面の中央に敲打痕の集積と見られるアバタ状の痕跡をもつ。4は平面偏円形の整った形状を呈し石質はやや緊密である。両面の磨痕は非常に滑らかで、それぞれ2個ずつ、不整形で断面は擂り鉢状の凹みをもつ。5は隅丸の矩形を呈し、両面及び両側面を研磨整形している。両面とも中軸上に不規則な擂り鉢状の凹みが3~5個隣接して並ぶ。6は長球形を呈し、両端を除いて磨られており、若干平坦になっている両面に、やや離れて2箇所ずつアバタ状の痕跡をもつ。J-2号住居址の出土である。本遺跡出土の凹石は、表裏両面に磨痕をもち、その中央に隣接する2個の浅い凹みをもつタイプが最も多いと言える。

磨石 (第20図7)

形状は平面円形で表面はゆるやかにふくらみ、裏面は平坦であり、石質は緊密な安山岩であ



第21図 明導寺遺跡出土石器実測図 (1 : 3) ただし1に限り1 : 7

る。全面が磨かれているが、特に表、裏面は滑らかである。本遺跡においては、このように磨痕のみをもつ円錐利用の石器は非常に少なかった。

石皿（第21図1）

非常に粗い石質の安山岩砕を用いており、もろい、平面形は卵形で、ほぼ主軸に一致する橢円形の凹みを有する。この凹みの周縁の対照的な位置に、2箇所のざらざらに荒れた部分が認められる。断面はゆるやかな三角形を呈するため、座りが悪い。裏面は蜂の巣石になっており大小約20個の凹みを有し、特に左側に集中的に穿たれている。この凹みは、大きなものは擦り鉢状を呈し、小さなものは不定形である。本遺跡から出土した磨痕をもつ凹石と磨石の総数がかなりのものになるのに対し、石皿はわずか2点であった。

石棒（第21図2）

安山岩製である。表面には敲打整形の痕跡と思われるものが若干認められる。両端を折損しているが、上端が細く下端が太い。断面はほぼ円形を呈する。か一2グリッド出土である。

玉類（第21図3～7）

3は硬玉製の玉斧である。形状は薄身の磨製石斧形と言えるが、刃縁に相当する下端部は平らに磨り減らされている。上半の中軸上に孔を有する。この穿孔は裏面から行なわれ、表面から補われたもので、断面は鼓形を呈する。表面には孔の上及び左上に穿孔部修正の痕跡を認める。4は真珠岩を偏円形に整形したものである。表、裏両面に數面の研磨痕を有し、また周縁も上端を除き入念に研磨されている。3、4はか一2出土であり、ここからは、もう1点、同質、同大の、不定形ではあるが研磨痕を有する、玉類の未成品と思われるものが出土している。石棒も同一グリッドの出土であり、造構は検出されなかつたが特殊な領域の存在が想定される。5は偏球形の流紋岩である。自然礫をわずかに研磨しているようであるが、石質が均質でないため表面は美麗とは言えない。6は凝灰岩製の大珠で、孔の部分から折損している。全面に敲打痕を残し、研磨されているが美麗な仕上がりとは言えない。表面は敲打の段階から左側に角をとつて整形されており、断面は不定三角形を呈する。孔は一方から穿たれたものと思われ、残存部分では直通しており、直径約5mmである。折損面を除き、孔中も含めて全面が黒色に変色している。本例はJ-2号住居址の、北壁に接して設けられた、ミニチュア土器を伴う石組の前から出土した。7は流紋岩製であり、両面に研磨痕をもつ。左側縁の下半を欠損し、両側縁にも損傷が見られる。北拡張区からの出土であり、おびただしい量の土器片に混って出土した。4・5・7は垂玉の未成品かと思われる様相を呈している。

（綿田 弘実）

第6章　ま　と　め

本遺跡の調査は14日間という短期間の調査であった。この間、実質的には、後述する茶臼山遺跡の調査も並行して行なっている。このような状況を考慮し、調査開始以前に両地区とも範囲確認調査を実施し、第1図に示したように遺跡範囲を確定した。範囲外については圃場整備の都合上、この段階で放棄せざるを得なかった。結果的には、集落はこの放棄した方に若干のびていた可能性はうかがえるものの、明寺遺跡は、54年度県営圃場整備事業の開始にあたって、新たに発見された新遺跡であって、急遽調査区に組み入れ不充分ながらも下記のような調査成果が得られた。

遺構は、住居址2軒、土塙3基が確認された。

J 1号住居址は、その検出にあたって困難をきたした。当初、礫群がその上面を覆っていて、配石造構ではないかという見解から、礫群の検出及び清掃を行なった。その際、礫群の間から顔を出していた炉石により、遺構であることが判明したのであった。

一面を覆っていた礫群は、大小さまざまの山石で遺跡をとりまく台地全体に存在することと、意図的配石がうかがえないこと等から、地形的にみて地すべり地であった関係上、自然原象によるものと判断した。

J 1号住居址は、こうした礫群の下部から検出され、遺物は、礫群内覆土から無文土器片が数点出土したのみで、床面直上からの遺物出土は皆無であった。住居址付近の礫群の間からは、第14図に示した、深鉢形土器と6本指の土偶の足が出土している。さらに、礫群検出以前の段階で遺構検出作業において南北にトレンチを入れた際、覆土約5cm程掘り下げると、10cm前後の細い礫群の上から縄文時代晚期の浅鉢形土器が出土した。この地点がJ 1号住居址の南西隅、P付近に位置することとなった。

この遺物の出土状態から見て、縄文晚期の住居址とするには早計であると結んだが、これについても根拠が薄い。茶臼山遺跡の項でも述べるつもりであるが、遺跡の立地としては、明確に、それぞれの時期で遷地しており、茶臼山地区は晚期の単純遺跡なのである。これから見てわざわざ住居址を、川を渡った対岸の高所に構築することは、どうしても理解できないこと、炉址の形態が後期に属すること等が筆者の考えるところである。

J - 2号住居址は、いわゆる柄鏡形の敷石住居址である。遺物はごく少量であるが、炉中の埋設土器等をみても縄文時代後期初頭の住居址と位置付けて、さしつかえないと思われる。覆土には、敷石とは関係ない大形の石が多量に混入していた。自然に大きな石が流れ込むとは考

えがたいことから、住居址放棄後石を投げ込んだものと考えたい。遺物の量が少ないことも住居址放棄を裏付けられる。また、敷石とされた平石は炉のまわりのみに存在していた。

土塁は、3基検出されたがいずれも遺物の出土は皆無であった。D1号土塁は、礫群を取り除いて構築されており、規模および土塁内底面に付着していた灰褐色の粒子等から土塁墓的要素がうかがえる。D2号、D3号土塁は、J2号住居址に隣接していて、土塁内に存在していた石とJ2号住居址内に存在していた石は、共に様相、状態等が類似しており、J2号住居址と時間的差がないものとおもわれる。

土器は、堀ノ内I式土器と加曾利BⅠ式土器の出土が大半を占める。北拡張区として調査区を新たに設けた地点では、堀ノ内I式土器が主体を占めている。また、北拡張区で出土した埋甕は、遺構を伴なわない単独出土であるが、東京都平尾遺跡で出土しているような甕棺として考えたい。口縁付近を打ち欠いて使用しているが、割れ口を見るとほぼ直線的に割られている。意図的にこの行為がなされたものと思われる。詳細は説明のところで触れたが、関東地方の土器に比べて、器高が低く上から押しつぶされたような器形となる。この傾向は、群馬県三原田遺跡の同時期の土器にもいえる。北関東、中部地方の特色といえよう。

なお、北拡張区は、おびただしい量の土器片が出土し、そのほとんどが小破片の無文土器であって、復原可能だったものは、16図2に図示した1個体にすぎなかった。埋甕が埋葬された墓地的領域から、その後は台地が切れる突端に位置していること等から、土器捨て場として利用していたことがうかがえる。

石器は、打製・磨製石斧、石鎌、凹石、磨石、石皿、石棒、大垂等が出土している。この中で出土量の多かったものは、石斧、凹石、磨石であり、総数50点以上にものぼる。石鎌は4点のみの出土であったが、完形品ではなく、全て小破片であった。石質はチャートである。特殊な遺物としては、石斧形の大垂を上げることができる。石材は硬玉である。このような形のものは、あまりその出土例が知られていない。また、J2号住居址内覆土から出土した15点の凹石は、より多くのことを暗示しているといえよう。反面、石鎌の出土が4点と微量なことも大きな特色となろう。

以上、北信での数少ない绳文時代後期の明專寺遺跡について検出遺構、出土遺物についてのまとめを記した。短期間の調査日程のなかを2遺跡の調査となり厳しい条件であった。調査団が長野県外まで遠く離れており、整理の段階においては各自、忍耐と自己犠牲を余儀なくされた。こうした努力によって、本報告書が刊行されるに至った。しかし、短期間の調査及び報告書作成では、いろいろな面で反省が生じてきている。

(森 尚登・島田 恵子)

茶臼山遺跡

I 遺構

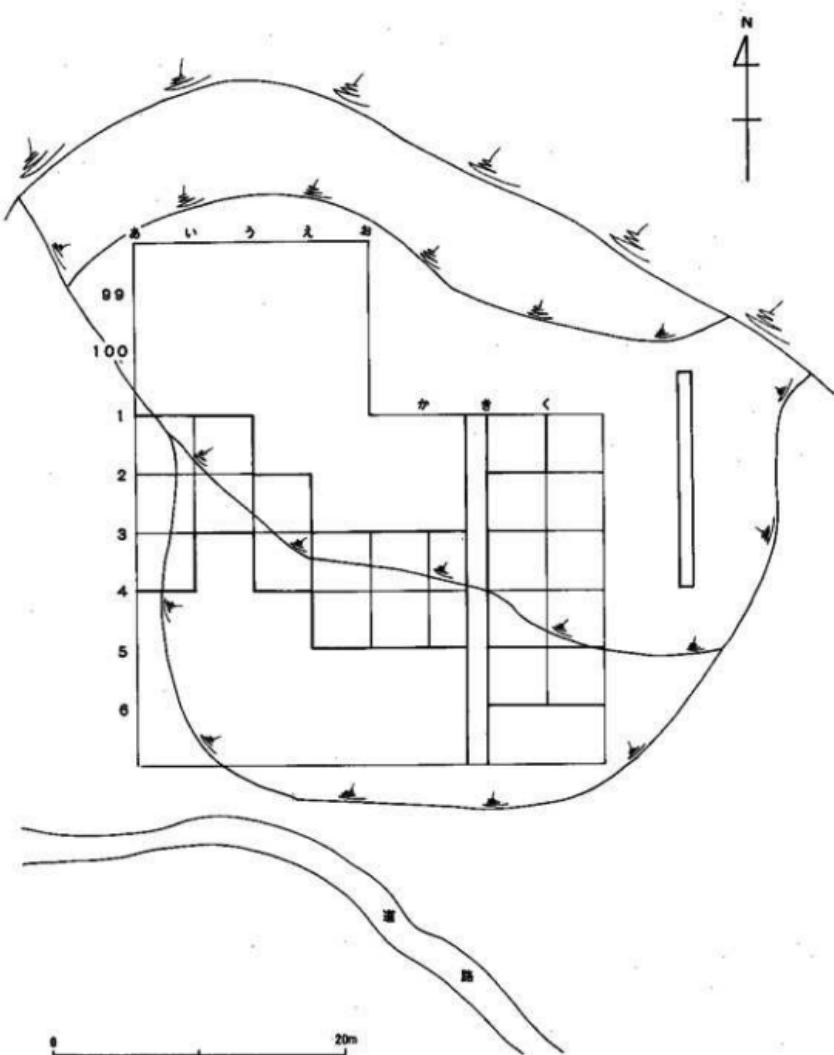
本遺跡では、遺構の検出は見られず、生活面としての遺物包含層のみが確認された。この遺物包含層は4層に分けることができたが、いずれの層を見ても黒色土層であるため、セクションでの層序確認はできたが、面的な調査は確立できなかった。結果的には層位学的な遺物の取り上げも徹底できず、遺物の取り扱いは、文様による分類に終止した。

また、土器は遺跡が溼田として利用されていたため、湿気によりもろくなっていた。注意深く水洗したが、文様が消滅するものが多く、このため、出土量に対して撮影に使用した遺物の量が少なくなった。

遺跡の立地としては、標高571mに位置し、八蛇川対岸の明專寺遺跡より3m程低い箇所にある。本遺跡調査区をみれば、南から北に向ってゆるやかに傾斜する斜面上に立地している。また東西方向は、両方ともに地山が上って居り、遺跡全体が大きな凹地状となっていた。このため、特に遺物の出土が集中した地点は、台地の切れる北端うーかー99・100・1・2グリッド区域であった。この地点での黒色土による落込みはより顯著で、当初は平面上からのプラン確認を試みたが困難をきたし、トレンチによる層序確認に切りかえ、慎重なる精査を行なっていったところ大雨に降られ、一夜のうちにこの凹地は水びたしとなってしまった。この水が最後まで弊害をおよぼし、上述したごとく層位学的な遺物の取り上げを不可能にした。さらに、南端は傾斜地の最上段に位置し、水路、農道、開田等の工事により最悪の状態にあり、上段、中段とも遺物の出土がみられたのは、土堤であったわずかな部分のみであった。

また、明專寺地区と茶臼山地区の比高差はそのまま縄文時代後期と晩期の選地差と考えることができよう。一般に縄文時代晩期の遺跡は低地へと標高を下げて行く傾向がある。目を武藏野台地に転じて見れば、縄文時代晩期の遺跡は、その大半を多摩川流域に見ることができる。多摩川は典型的な河岸段丘を形成することで知られているが、縄文時代晩期の遺跡は、第一段丘上に全て位置している。多摩川の氾濫原から2~3mの比高である。この地域での縄文時代の他の遺跡は第2段丘以上にあり、比高としては5~10m以上の差がある。中部山岳地帯にある本遺跡も時期による立地の変遷がたどれた。このことは、晩期の遺跡が山岳地帯においても低地下するという意義のある事実が得られ、縄文時代晩期の遺跡が一般に低地下するという論を一步進めたことになる。

(森 尚登・島田 恵子)



第1図 茶臼山遺跡遺構全体図 (1:200)

2 遺物

1) 土器及び土製品

第1群土器（第4図86～96）

本群土器は、縄文時代後期の土器を一括した。時間的に若干の差が認められる。色調は、黒褐色から黄褐色を呈する。胎土には大粒の石粒を多量に含む。焼成は良好である。

86～93は、沈線を主文様とするものである。器形は89のみが鉢形で、他は全て深鉢形土器である。沈線による文様施文は、86、87のように太い沈線を數本横走させるのみのものと、88～93のように斜向するものがある。92、93は頸部に沈線を横走させ、以下斜向させる。91は稜形状に交叉させる。また、92は地文に縄文を残す。これらの土器は、東海地方、伊川津貝塚、吉胡貝塚、姫塚遺跡などにその類例を見ることができ、同地方からの搬入品と考えられよう。

94～96は、やはり沈線による区画を主文様とする土器であるが、94、95は地文に縄文をもち磨消縄文技法が使用されている。色調は黒褐色を呈す。胎土、焼成ともに粗雑な土器である。器形は、94、95とともに浅鉢形土器で、94は口縁が直立し、95の口縁は外反し頸部がくびれる。96は深鉢形土器である。いずれも加曾利B II式土器と思われる。

第2群土器（第2図1～17・26、第4図84、85、第3図53、54）

本群土器は、いわゆる亀ヶ岡系土器を一括した。このため時間差が生じてしまった。色調は黄褐色から黒褐色を呈し、胎土は緻密で焼成も良い。これらの土器の中には中心である東北地方の土器が搬入されたもの（1～10）と模放されたもの（第2図11～17・26、第3図53、54、第4図84、85）に分類することができる。

〈搬入されたもの〉

6は、頸部が「く」の字形にくびれる壺形土器である。文様は頸部に集中する。二本の刻み目を持つ沈線を口唇にめぐらし、以下三叉状の沈刻を連鎖的に組ませる。また肩部に隆帯を一条めぐらす。5は、口唇に刻み目を持つ同時期の土器で、以下L Rの櫛文が施される。器形は皿形を呈する。8、9は、土器の内側を沈線による三叉文を連鎖させる土器である。6の文様構成とほぼ同じである。大洞B-C式土器と思われる。

1～4、7は、いわゆる雲形文が施される土器である。1は變形、2、4、7は皿形か浅鉢形を呈する。3は徳利形の壺形土器と思われる。大洞C1式と思われる。

〈模放された土器〉

84、85は、沈線間に刻み目を持たせ、いわゆる羊齒状文を模放したもので稚出な構図に変化している。器形は壺形土器を呈するものと思われる。大洞B-C併行期のものと思われる。

11～17、26、53、54は、磨消縄文によって雲形文が施されるか、あるいは亀ヶ岡式土器の雲形文が模放された土器である。色調は黄褐色、黒褐色を呈する。胎土は緻密で、焼成も良い。文様の表出は、よく模放されているものと、模放が粗拙で雲形文が完全に崩れるものと、その



第2図 茶臼山遺跡出土土器拓影 (1 : 3)

幅はかなりある。

17、53、54は、比較的亀ヶ岡の雲形文の規格がまだ残っているもので、器形は13、14が鉢形17が壺形、53、54が皿形を呈する。

11、12、15~16は、文様が沈線の単純な三叉様のものと完全に変化してしまっている。器形は、11、15、16が鉢形、12が口縁が外反する浅鉢形を呈する。

第3群土器（第2図27~37、第3図46~52、55~57、第4図 100~ 103）

三叉文、三叉入組文が施される土器群を一括した。大洞B式に併行する時期が最も多用される時期である。大洞を含めて、関東地方、北陸地方、中部地方で地方的な発展を見ることができる。特に関東地方の安行III式は、唯一亀ヶ岡の変遷とは対応しないで独自の変化がみられるが、北陸、中部地方の三叉文は、亀ヶ岡と密接な関係をもつて地方色豊に展開していく。大きく分けて、三叉文が入り組むものと入り組まないものとに分けられる。色調は黒褐色が大半を占め、黄褐色が若干ある。胎土には砂粒を多量に含むが焼成は良い。

103は、台付皿形土器の台部である。文様は、皿部と台部を沈線により区画し、区画の内側を透し三叉文を施す。三叉文は、単独に施文され、相互の関連はもたない。103以外全て三叉文が入り組む。

深鉢形土器には、30、31、32、46、50、100がある。文様は渦巻文などが主文様となるが、渦巻文を結ぶ三叉文が、磨消繩文によって強調され入り組む。100は、この完形土器で渦巻文よりも磨消によって強調された三叉文が目立つ。

その他の器形としては、鉢形土器に35、36、38、40、41、48、49がある。このうち48、49は繩文のかわりに烈点文が施される。浅鉢形土器は25、32、39、45、47、51、52、56があり量的に最も多い。数は少ないが、皿形土器は29、37、57、壺形土器は27、28、33もある。

第4群土器（第2図、18~22、第3図66）

鍵の手文を施すものを一括した。雷文とも呼ばれている。色調は全て黄褐色を呈し、胎土は緻密で焼成も良い。器形は深鉢形が圧倒的に多く、23のみ波状の皿形土器となる。文様は帯繩文間に施文され、「互」の字形に入り組む22、24、66、入り組まない19~23がある。また、20 66のように烈点が施される土器もある。

第5群土器（第3図58~63）

帯繩文間、あるいは沈線文間に逆「S」字状の沈線による入り組が施されるものを一括した。色調は黒褐色で、胎土は緻密で焼成も良い。

器形は、61、63が浅鉢形で、他は皿形を呈する。文様は帯繩文の施されるもの58、60、62と、施されないもの59、61がある。

第6群土器（第2図64~66、68、71~75）

刺突烈点文帯を持つものを一括した。色調は黒褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。



第3図 茶臼山遺跡出土土器拓影 (1:3)

浅鉢形土器64は、口唇にLRの斜縞文を持ち以下烈点文が施される。壺形土器としては65、68、71、72、73があげられる。頸部がくびれ、胴が張る71のように縞文が施されないものもある。壺形土器は72の1個体のみであった。刺突烈点文帶は縞文帶にはさまれている。74は皿形土器である。2条の刺突烈点文帶がめぐる。

第7群土器（第2図67、69、70、第3図98、99）

縞文の施される土器を一括した。色調は黒褐色を呈し、胎土は緻密で焼成も良い。

67は、鉢形土器で太い沈線で帯縞文が区画される。67、69、99はLRの縞文が施される土器で、器形は浅鉢形を呈する。70は口唇部に「T」字形三叉文が刻まれている。99は結節縞文が施される。深鉢形土器で撚糸文が綾杉状に施される。

第8群土器（第4図76～80、83）

粗大な工字文を一括した。色調は黄褐色で胎土には砂粒を多量に含むが焼成は良い。

器形は全て浅鉢形を呈する。79のように頸部がくびれるものもあるが他はほとんど内弯する。文帶は頸部、肩部に集中し、78、79、80のように工字文が2段重なるものもある。

第9群土器（第4図81、82）

氷式土器を一括した。色調は灰黒色を呈し、胎土は緻密で焼成も良い。

81、82ともに器形は浅鉢形を呈する。81は口縁が内弯し、82は波状口縁で外反する。口外帶を有し、他は無文で研磨されている。体部文様としての工字文は施されない。

第10群土器（第4図101、102）

いわゆるミニュチャ土器を一括した。色調は黄褐色で胎土は粗く焼成も雑な土器である。

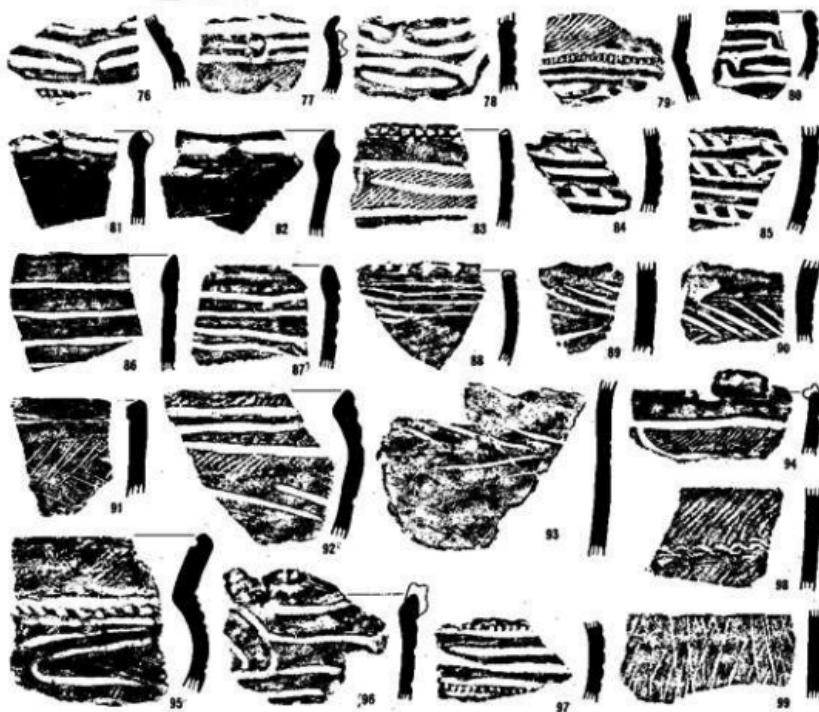
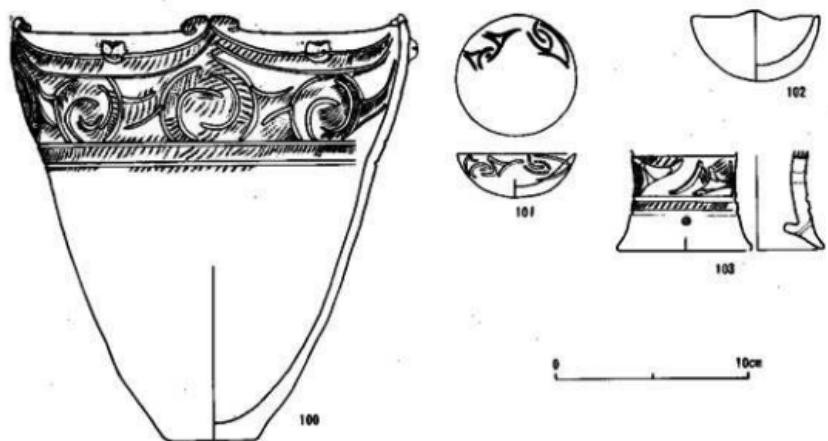
101は、第3群土器に含まれる土器である。沈線による入り組三叉文が施されているが、それぞれの三叉文は単位として成り立たない。展開図で示したとおり、文帶は土器の半分のみに施文される。102は無文の土器で、口唇に突起を1ヶ所有する。101、102ともに杯形の土器である。

第11群土器（第3図42～44、55）

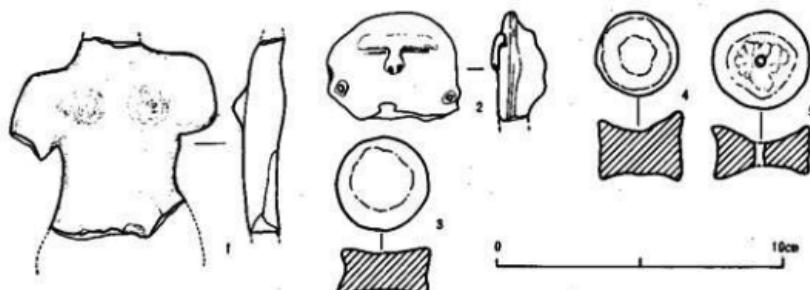
時期不明な土器を一括した。胎土を見ると明專寺地区で出土した後期の土器とは異なり、晩期的な様相を示す。

43は口縁がやや内弯する鉢形土器である。文様の構成を見ると堀ノ内式の様相が認められるが、第3群土器に入る可能性もある。42の器形は皿形である。後期にはこの器形はまだ出現しないが、施文される刻み目の文様が該当する土器群は本遺跡ではない。40は第3群土器に含まれる可能性がある。55は口縁の内弯する浅鉢形土器と思われる。小破片のため文様の詳細がわからないため本群にまとめた。沈線による橢円系統の文様が施文されそうである。

（森 尚登）



第4図 茶臼山遺跡出土土器拓影及び実測図 (1:3)



第5図 茶臼山遺跡出土の土製品実測図 (1 : 3)

土偶、耳栓

土偶 (第5図1、2)

1は、きー1グリッドより出土した。現存する長さ6.8cm、厚さ2.0cmを計る土偶の胴体である。胎土には砂粒を多量に含み焼成は粗悪である。色調は黄褐色を呈する。乳房のふくらみからみて成人女性を現わしたものと思われる。本土偶の左肩は製作途上より欠損している様相を呈する。右手のように欠損しているものは普通に出土するが、最初から意図的になくすものは類例が少ないものと思われる。

2は、きー5グリッドより出土した。まゆ毛と鼻を浮き出しげみに表現している。目は細い沈線で軽く引き、わずかに痕が残る程度に描いている。鼻の穴は楕円形でリアルである。かなり下の位置に耳と思われる円形の刺穴が左右にあり、これは裏にも同位置に施される。耳そのものよりも、耳栓を付けた耳を意図しているのであろうか。胎土は緻密で焼成も良い。黄褐色を呈する。

耳栓 (第5図3、4、5)

3、5はえー1グリッドより出土した。2はくー2グリッドより出土した。総数で6個の出土があったが、ほとんど同じ形のため3個のみ図示した。

色調は黄褐色で胎土は粗く粗雑な作りであるが、全て丁寧に研磨されている。5のみ中央に孔が開けられている。孔の開け方は、表裏両方向から別々に開けられているために、孔の真中近くが狭まっている。厚さはまちまちで、5が0.9cmと最も薄く、4が1.6cmと最も厚い。他の耳栓の厚さはこの間におさまる。直径は、5が3.5cmと最も大きく、4が2.9cmと最も小さい。

(森 尚登)

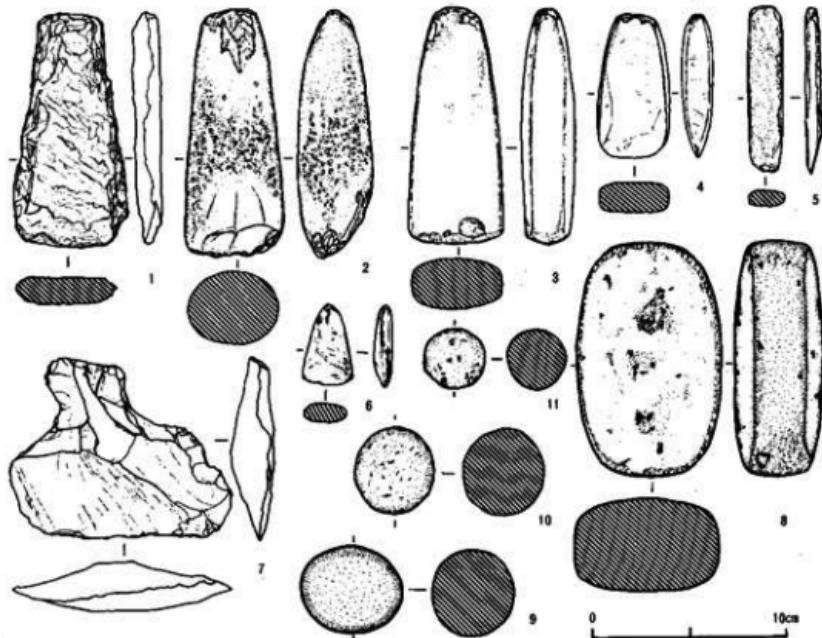
2) 石 器 (第6図1~5、第7図1~9)

打製石斧 (第6図1)

本例は綠泥質凝灰岩である。形態は刃部にむかって直線的に広がる撓形である。素材の性質上、両面とも平坦で厚さは一定である。両面とも周縁のみを比較的細かく剥離しており、胴部から頭部にかけての両側縁は入念に刃溝しがなされている。刃縁は若干磨耗が見られる。本遺跡からは、ほかに撓形と思われる破損品が2点出土したのみであった。

磨製石斧 (第6図2~6)

1は唯一の乳棒状石斧で、断面は偏円形を呈する、頭部は欠損が見られる。胴部には両面とも敲打整形によるアバタ状痕が明瞭に残り、刃部の表面には研磨面が認められる、刃縁は破損し、特に裏面は大きく剥落している、裏面は黒色に変色しているが、剥落部分まで変色しているため、着柄痕かどうかが明確でない。泥岩製である。2は凝灰岩製で、頭部は磨耗してざらざらになり、若干の剥落を認める。刃部はほぼ丸くなる程度減しておらず、再加工又は再利用品と

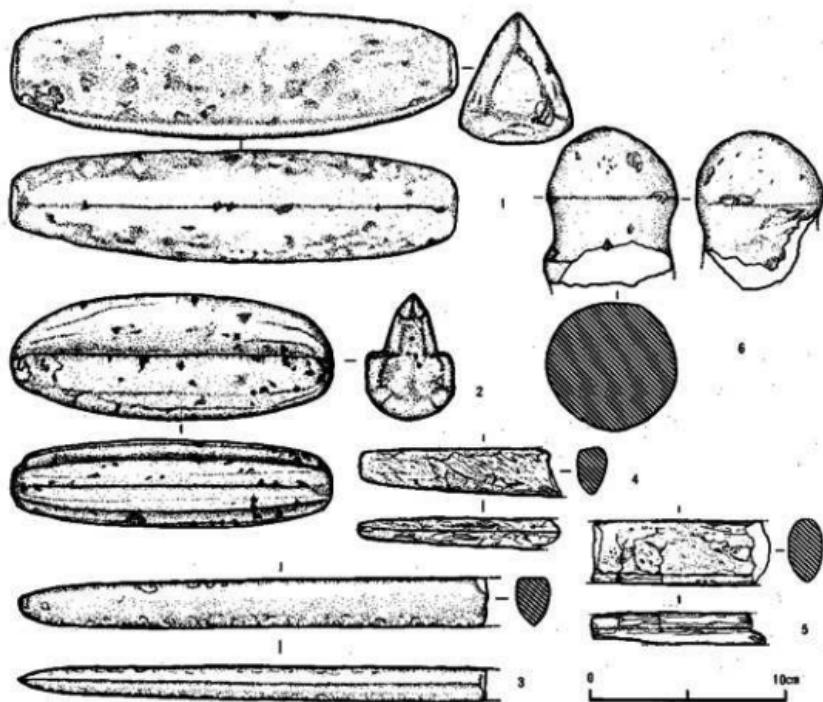


第6図 茶臼山遺跡出土石器実測図 (1:3)

思われる。4は流紋岩製の小型品である。頭部はわずかに潰れており、刃縁は磨耗し、微細な刃毀れを認める。5は泥岩製で、長さ8.5cm、巾1.8cm、25gを計る非常に巾の狭い特異な形態である。厚さはほぼ一定している。頭端及び両側面には研磨された面を残すが、表、裏面は風化している。刃部は若干狭くなり、片刃である。刃縁には新しい破損部分があるが、円刃を呈していたと推定され、鋭利ではないが細部加工用の木工具と考えられる。6は真珠岩製で、長さ4.2cm、15gを計り、本遺跡の最小例である。頭部が尖っており、裏面には敲打痕をとどめる。片刃を有し、刃縁はかなり磨耗し、刃毀れしている。本例は工具としての石斧という以外の用途が考えられる。本遺跡から磨製石斧は9点出土しているが、多彩な形態をとっており、用途もそれに応じて分化していたと思われる。

石匙（第6図7）

珪質泥岩製で、長さ9.2cm、巾11.4cmを計る大型の横型石匙である。つまみの端部に自然面を



第7図 茶臼山遺跡出土石器実測図（1：3）

もち、これを打面としている。表面からの剥離でつまみの左側を作り出し、右側は裏面からの入念な調整によっている。刃縁は、表面の一撃でできた大きな剥離面と裏面の大部分を占める第1次剥離面とがなしており、直線状で鋭利である、わずかに磨耗し、裏面は刃毀れしている。本遺跡から出土したスクレーパー類はほかに同質のものが1点のみあるが、黒曜石、チャート等の多数の不定形剥片の幾つかが用いられていたのであろう。

磨石（第6図8～11）

すべて安山岩を用いている。8は全面から研磨整形されて石鹼状を呈する。表、裏面は非常に滑らかに磨かれているが、両面とも中軸上に2箇所ずつ、凹みとは言えない程度のわずかに荒れた部分がある。周縁の上、下端はやや粗い、このような形状をとるのは本例のみである。9は形状、大きさ共に鶏卵に似ており、全面が磨かれている。小型の磨石と言えよう。10はさらに1まわり小さく、球形を呈する。石質はやや粗く、明確な磨痕は認められない。小型の磨石、あるいは愛玩石であろうか、石弾とでも呼ぶのが適當かもしれない。11は10をそのまま小型にしたようなもので、径4.1cmを計る。10同様で分類に迷うところである。

石冠（第7図1～2）

1、2とも花崗岩製である。1は長さ23.0cm、高さ6.5cm、巾5.8cmを計り、断面は二等辺三角形を呈する。上端の稜は直線的で、両端には正三角形の平面がとてある。非常にもろい石質のため表面は粗い。2は1より1まわり小型で、長さ16.5cm、高さ6.5cm、巾4.5cmを計る。正面は長橢円形を呈し、中軸に沿って両面から削って段をつけているため、断面は凸字形を呈する。上段の稜は鋭く、両端には平面を作つておらず、横方向の研磨痕を認める。

石剣（第7図3～5）

出土した3点はいずれも破損品である。3は先端の部分で24.0cmを計る。泥岩製で、3点の中では最も保存状態が良好である。峰の部分は非常に美麗に仕上げられている。平の部分には敲磨痕が認められ、左右相称の蛤刃を形成している。刃縁は鋭い。4は柄の部分である。軟質の泥岩を用いていたために峰の一部以外は風化しており、研磨された面は残っていない。本例も蛤刃を作り出しているが、峰の面が傾いているため、断面形は左右相称となっていない。5は両端を折損している。峰と平とを画する棱、及び刃縁が鋭くないため、断面は長卵形を呈するが、本例も蛤刃をなしている。緑色の凝灰岩製であるが、一部を除いて朱褐色に変色し、節理の方向に亀裂が走る。火熱を受けたためであろうか。

独鉛石（第7図6）

凝灰岩製である。下端をほとんどすべて欠損しているため、石棒の頭のように見えるが、正面図の左下にわずかながら下端の一部が残つており、推定復原すると長さ約10.5cmの独鉛石となる。断面はどの部分も円形を呈し、太く短い丸ぐりしたタイプである。

(綿田 弘実)

3 茶臼山遺跡まとめ

本遺跡は、分類した土器でわかるように、縄文時代晚期の単純遺跡である。残念ながら遺構の検出はできなかった。出土した遺物、土器、石器についてまとめてみたい。

(土 器)

第1群土器～第11群土器に分類できた。この分類方法は、既に報告書の刊行されている「佐野遺跡」の分類法に基づいた。さらに当遺跡の性格を明らかにするため、出土遺物のよく類似した遺跡を念頭に置いた。

長野県では前述した「佐野遺跡」で、他に新潟県頸城郡妙高町「葎生遺跡」、富山県高岡市「勝木原遺跡第一回地点」、石川県金沢市「八日市新保並びに御経塚遺跡」が具体的な遺跡名である。これらの地域はいわゆる亀ヶ岡系文化の第2次伝播圏に属し、近接する第1次伝播圏の影響をうけつつ、それぞれの地域に土着的な土器の変遷を生んだ。この項では本遺跡がどの地域の土器により酷似するかを考えたいと思う。

第1群土器は、縄文時代後期後半に位置づけられるもので、地文に縄文をもたず、文様は全て沈線によって施文される。この土器群は、東海地方から長野にかけての特徴的な土器であるといわれている。佐野遺跡では出土例が見当らないが、葎生遺跡では、〈後期新〉として分類されており、東北地方晩期直前のいわゆる瘤付き土器との共存として扱っている。本遺跡では、同類土器は後期の土器として唯一単独に出土している。瘤付き土器は確認されていない。今後長野県で他の後期の土器との判出関係が問題となる土器群である。

第2群土器～第9群土器は、亀ヶ岡系土器の変遷にそういうことができ、大洞B、B-C、C、C₂、A式までの土器にあてはめることができる。

第2群土器は、搬入したものと、模倣したものとに分け、それぞれ時期を明記した。

第3群土器は、三叉文、三叉入組文が施される土器で、縄文時代晩期の中で最も地域による土着的傾向を見ることができる時期である。本遺跡の三叉文、三叉入組文を他の遺跡の同種土器と比べてみたい。

本遺跡、佐野遺跡、葎生遺跡、勝木原遺跡、新保、御経塚遺跡、共通して三叉入組み文が多数出土する。佐野遺跡での三叉文の入組み方は、「三叉文の系譜」報文中的模式図10、11のように渦巻状に入念に入組ませるのが特徴となる。また、本遺跡を含め念頭において他の3つの地域の遺跡の三叉入組み文は佐野遺跡のように入念に入組まない。本遺跡の三叉入組み文は、入念に入り組ませる三叉文のタイプをほとんど含まない。本遺跡の三叉入組み文は、

特に「蓀生遺跡」のものに酷似している。さらに第3図47、52のように三叉入組み文が崩れ、むしろ、雲形文のイミテーション化されたようなタイプの土器の出土も蓀生遺跡に例が多い。このような点などを考慮すると、本遺跡は、同一県内の佐野遺跡よりも、むしろ新潟所存の蓀生遺跡に近い土器の様相を示す。佐野遺跡の三叉入組み文が入念に施されるタイプに比べ、本遺跡、蓀生遺跡の三叉入組み文は、入組み方が単純である。このことは、時間差をも考えられる可能性があり、本遺跡の方がやや古式の様相が伺えるのではとおもわれる。

また、前述した第1群土器が佐野遺跡には出土せず、本遺跡、蓀生遺跡には出土する。そして直後にこの入組み文を持つ土器が盛行するのである。

第4群土器、第5群土器はいずれも大洞C₁～C₂の時期に比定できる。佐野遺跡では、第5群土器は、第4群土器の鍵の手文の文様帶の中に含まれており、第5群土器として単独には出土していない。本遺跡においては、鍵の手文の文様帶に含まれるものとは別に、この文様のみの土器が出土している。鍵の手文の方角的なモチーフとは別の系統として佐野遺跡では説明されているが、時間的な差は否定できないものと思われる。第5群土器は大洞C₂に対比できよう。

第6群、第7群第8群土器も大洞C₁～C₂式に比定できる。そのうち第7群土器は大洞C₂式以降に伴出する粗製土器に施される縄文の種類である。第8群土器は、いわゆる粗大な工字文が施される土器群で蓀生遺跡では、大洞C₂式に本土器群が多量に伴出されることが知られている。

第9群土器は水式土器で、大洞A式に比定できる。10群土器は第3群土器の中に入れられる。第11群土器は、時期不明な土器として一括したが、蓀生遺跡の土器を見ると大洞C₂式期に類例がみられそうである。

以上土器の概観に触れてきたが、本遺跡では、特に、三叉入組み文の時期について中心に考えてみた。結論を言えば、本遺跡の三叉入組み文は、本県の佐野遺跡より、北陸地方や、新潟地方の土器の様相に近いことが言えようである。さらに三叉入組み文の時期としては、本遺跡の土器が佐野遺跡の土器に先行するものと思われる。大洞B式の中でもより古い様相が本遺跡では伺える。

(森 尚登)

(石 器)

縄文時代晚期特有の石器として、石剣、石冠、五角形の石鎌を上げることができる。

石剣は、本遺跡では3個体出土している。いずれも片刃の偏平なものである。出土例は東北地方に多い。

石冠は2ヶ出土している。出土例は、北陸地方や岐阜に多いことが一般に言われている。この石冠については大別して2つのタイプに分けられる。冠状の握りがつくものと、つかないものがそれである。前者の出土例は北陸地方に多く、石川県御経塚遺跡、岐阜県長瀬遺跡のものが知られている。後者のタイプは、本遺跡出土のタイプで、新潟県浮津遺跡でも2例出土して

いる。この2つのタイプの石冠は、北陸地方では両方ともに出土しているようであるが、長野から東北地方にかけては後者のタイプが多いと思われる。

石鎚については、写真図版で一括しておいた。縄文時代晚期特有のいわゆる飛行機鎚の出土はないものの、それにごく近い五角形鎚は多数出土している。飛行機鎚に関しての論文としては鈴木道之助氏の「縄文時代晚期における石鎚小考」古代文化1974、26がある。この論考では飛行機鎚の出土範囲、時期について詳細に述べられており、一応出現を東海地方におくことが読み取れる。これについて異存はなく、別の機会に考察してみたい。ここでは事実のみ記載する。

本遺跡での石鎚出土総数は、表採を含めて107個にものぼる。内訳は、有柄51個、無柄56個であった。このうち五角形鎚は有柄8、無柄2の計10個であった。石質はチャートが70個と圧倒的に多く、頁岩系統が26と続く。黒曜石は11個のみであった。各石材ともに有柄、無柄の割合はだいたい半々である。石材によって有柄、無柄の石鎚を区別して作ることはない。

以上、本遺跡の石器についてまとめた。縄文時代晚期特有の石器は全て出揃っている。

(森 尚登)

引用参考文献

明專寺遺跡

- 1 安孫子昭二・可児通宏「平尾遺跡調査報告書1」南多摩郡平尾遺跡調査会 1971
- 2 折原繁他 「千葉市中野僧御堂遺跡」愛知県渥美郡渥美町教育委員会 1976
- 3 紅村弘 「東海先史文化の諸段階」 1975
- 4 後藤守一他 「蛭見塚遺跡」浜松市蛭見塚遺跡調査団 1962
- 5 鈴木保彦 「東正院遺跡調査報告」神奈川県教育委員会 1972
- 6 永峯光一・安孫子昭二「鳴川遺跡群M地点」町田市埋蔵文化財調査報告第3号 1972
- 7 久永春男 「第四トレンチ土器概観」埋蔵文化財調査報告1 1951
- 8 久永春男他 「伊川津貝塚」愛知県渥美郡渥美町教育委員会 1972
- 9 吉田格 「横浜市称明寺貝塚」東京都武藏野郷土館報告1

茶臼山遺跡

- 1 山内清男 「日本遠古の文化」 1939
- 2 山内清男 「第2トレンチ土器概観」吉胡貝塚埋蔵文化財調査報告1 1951
- 3 永峯光一 「千曲川沿岸地方における晩期縄文式土器に就いて」石器時代1 1955
- 4 高堀勝喜 「金沢市近郊八日市市新保並びに御経塚遺跡の調査」押野村史 1964
- 5 中川成夫 岡本勇 加藤普平 「芦生遺跡」立教大学博物館学講座調査報告4 1967
- 6 渡辺 曼 「勝木原遺跡」富山県立高岡工芸高等学校地理、歴史クラブ 1967
- 7 永峯光一 「佐野」長野県考古学会研究報告書3 1967
- 8 川崎義雄 「東京都調布市下布田遺跡の特殊遺構」考古学ジャーナル37 1969
- 9 永峯光一 「水遺跡の調査とその研究」石器時代9 1969
- 10 戸田哲也 「町田市ナスナ原出土の晩期縄文土器」多摩考古11 1971
- 11 菊田芳雄 「千綱谷戸C-E S地点の調査」 1972
- 12 久永春男 「伊川津貝塚」愛知県渥美郡渥美町教育委員会 1972
- 13 能登健 「柏江市以上遺跡」東京都教育委員会 1973
- 14 紅村弘 「東海先史文化の諸段階」 1975
- 15 折原繁 「千葉市中野僧御堂遺跡」(財)千葉県文化財センター 1976
- 16 坪井清足、金闇惣、小野山節 「日本原始美術大系5・武器、装身具」講談社 1978



1 遺跡遠景（東方より）



2 調査区近景



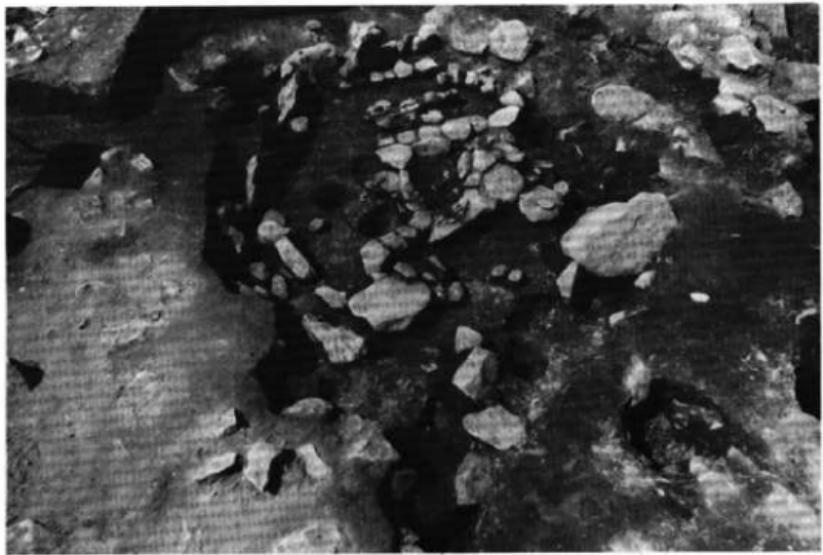
1 J I号住居址確認状況（北方より）



2 J II号住居址全景（南方より）



1 J 2 号住居址確認状況（南方より）



2 J 2 号住居址全景（南方より）



1 J 2 号住居址、炉と埋設土器（西方より）



2 D 1 号土塙全景（北方より）



1 オー6 グリッド土器出土状態



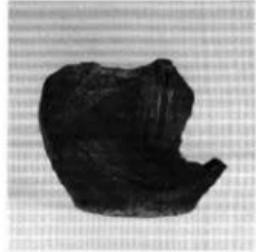
2 北拡張区埋甕出土状態



1 J 1 号住居址出土土器 (1 / 3)



2 J 2 号住居址出土土器 (1 / 3)



3 北擴張區出土土器 (1 / 3)



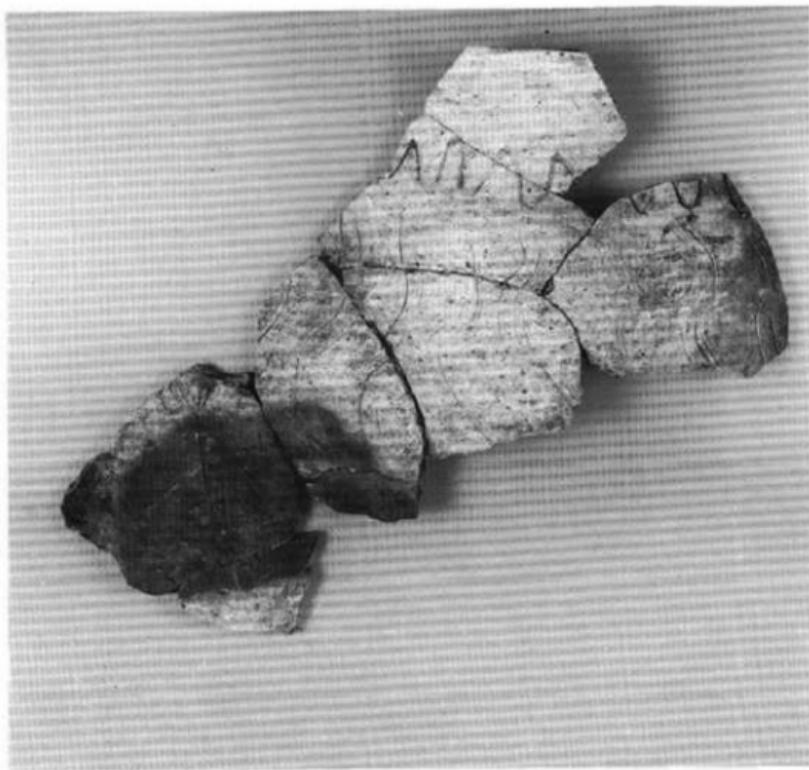
包含層出土土器 (1 / 3)



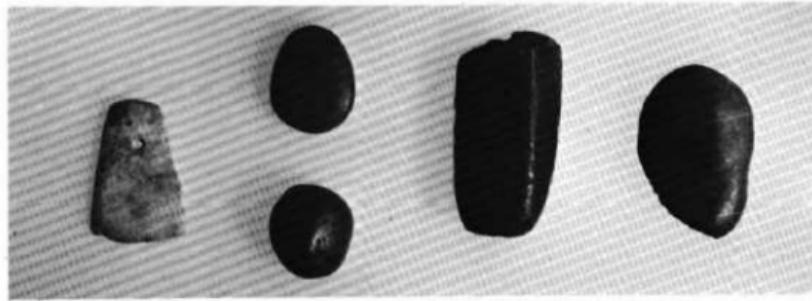
北擴張區出土土器 (1 / 3)



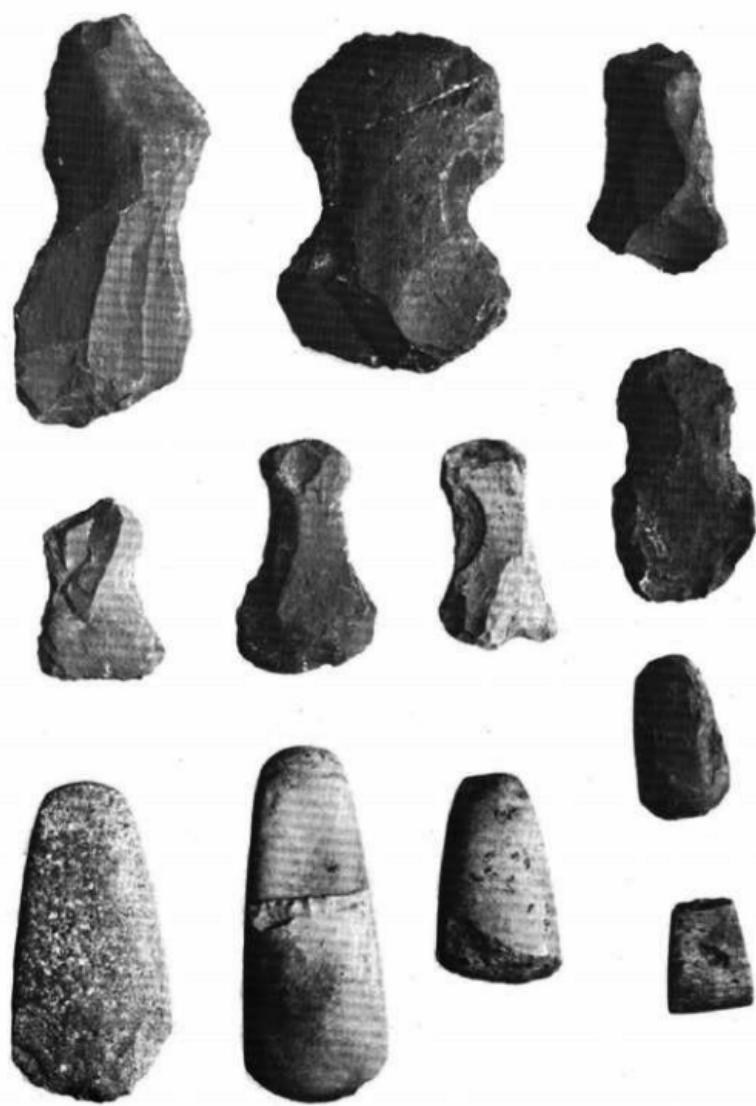
北抵张区出土土器 (1 / 3)



1 オー 6 グリッド出土土器 (1 / 3)



2 石器 (1 / 3)



石器 (1/3)



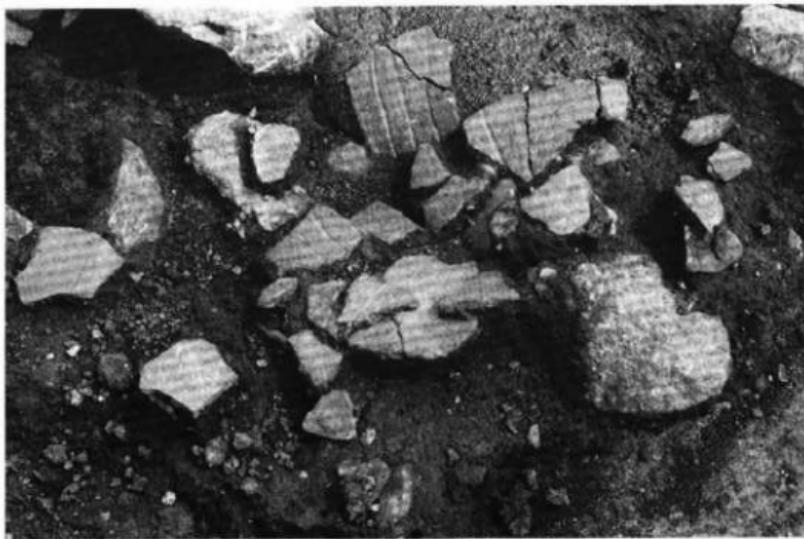
1 遠景（東方より）



2 近景（南方より）



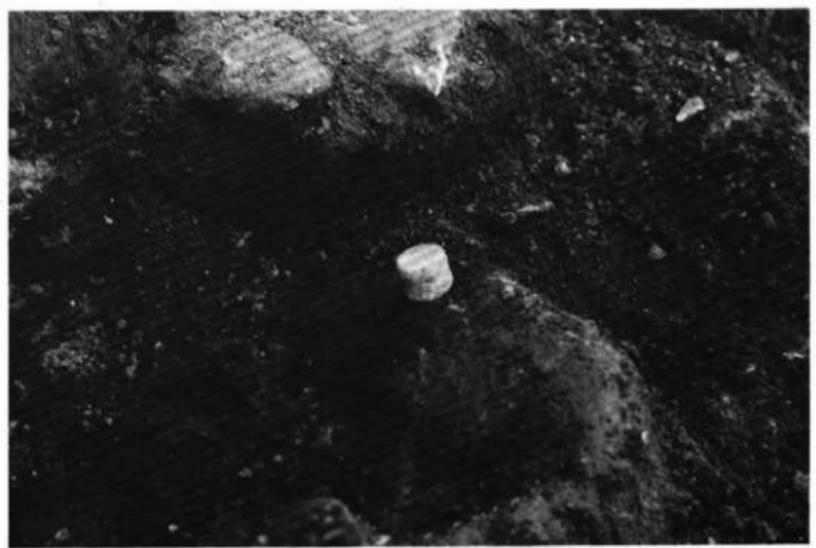
1 エー4 グリッド土器出土状態



2 エー5 グリッド土器出土状態



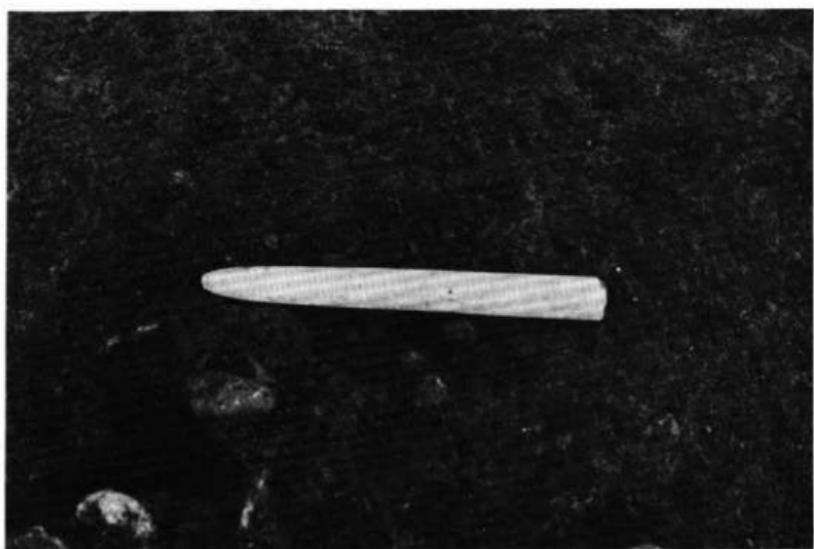
1 ラー1 グリッド土器出土状態



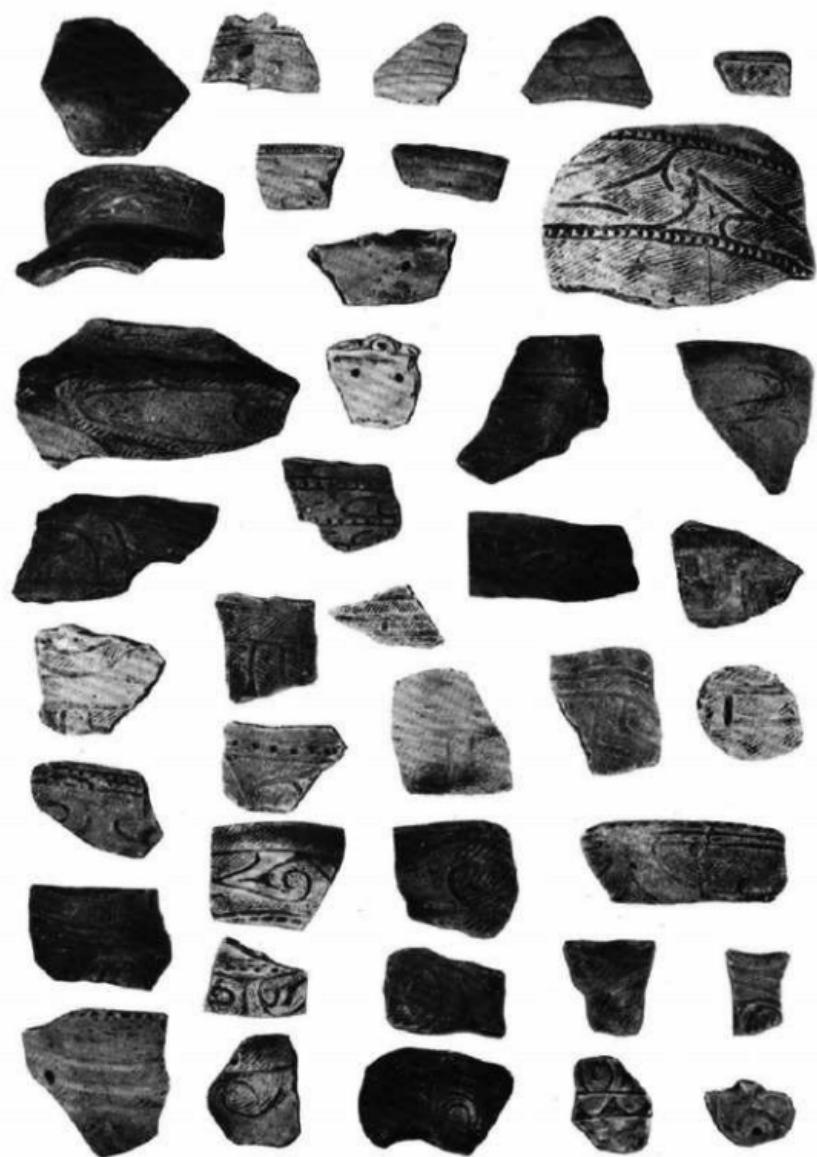
2 ニー1 グリッド耳栓出土状態



1 えー2 グリッド石冠出土状態



2 えー99グリッド石剣出土状態



包含層出土土器 (1 / 3)



包含層出土土器 (1 / 3)



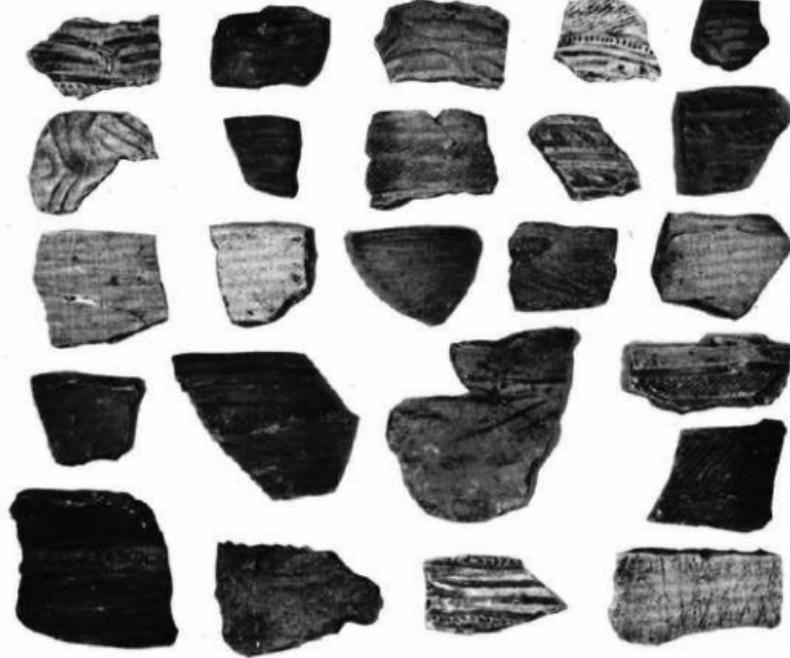
1 きー3 グリッド出土土器 (1/3)



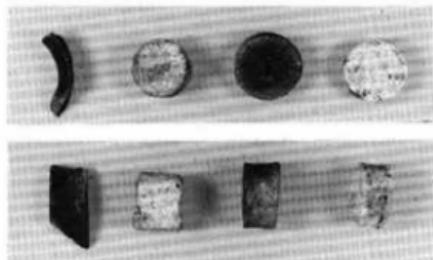
2 左おー100グリッド出土土器 (1/3)
右うー3グリッド出土土器



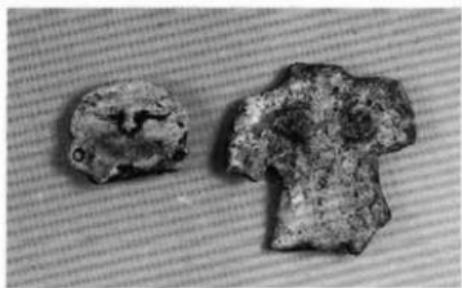
3 うー1 グリッド出土土器 (1/3)



4 包含層出土土器 (1/3)



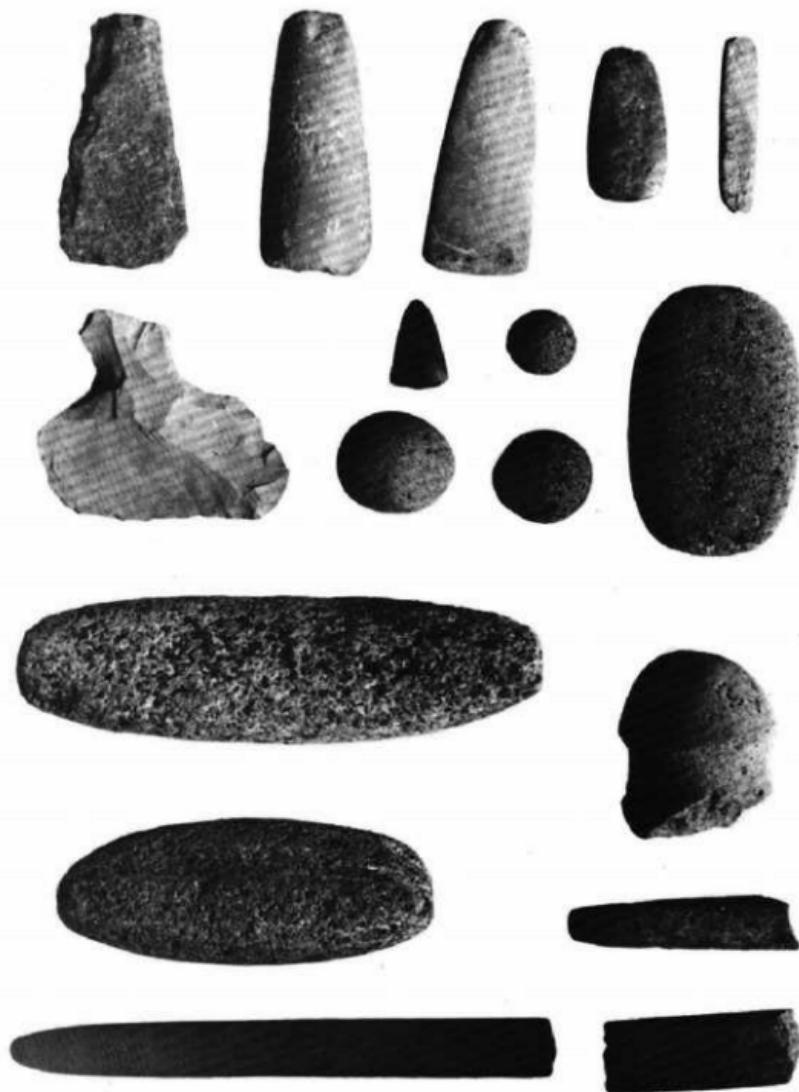
1 耳栓 (1 / 3)



2 土偶 (1 / 3)



3 石器 (1 / 3)



1 石器 (1/3)

明尊寺・茶臼山遺跡

発行 1980年5月25日

発行者 長野県上水内郡牟礼村
牟礼村教育委員会

編集 明尊寺・茶臼山遺跡調査団

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

